

磯辺 I

— 新潟県柏崎市 磯辺遺跡発掘調査報告書 —

2017

柏崎市教育委員会

磯 辺 I

— 新潟県柏崎市 磯辺遺跡発掘調査報告書 —

2017

柏崎市教育委員会

序

善根地区は、刈羽三山のひとつである八石山（標高 518 m）の西麓にあり、鯖石川が形成した段丘に立地しています。これまで中世の山城や石造物が所在していることが知られていましたが、近年行われた埋蔵文化財の試掘調査により、善根大坪遺跡・磯辺遺跡といった古代・中世の集落跡を発見することができました。

そうした中、善根地区を南北に走る県道において、歩道設置工事の計画が進められています。施工区域の一部で磯辺遺跡に影響が生じる区域があるため、当市教育委員会では平成 27 年度に記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。本書は、その成果を報告するものです。

発掘調査では、平安時代の土器などが出土し、柱穴や溝も検出することができました。遺跡はさらに南側へ展開しています。調査区が小さいため、発見された資料は多くはありませんが、当時の人々がのこした痕跡であることは間違ひありません。今後、これらをまとめた本書が活用され、地域の歴史を理解するための一助となれば幸いです。

最後に、一般県道田代小国線 歩道設置工事の事業主体者である新潟県、調査に格別なる御助力と御配慮をいただいた地域の皆様、御指導くださった新潟県教育委員会、発掘調査に携った皆様や関係者各位に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

平成 29 年 3 月

柏崎市教育委員会

教育長 本間 敏博

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字善根字磯辺地内に所在する磯辺遺跡で行われた発掘調査の記録である。
2. 本調査事業は、新潟県（担当：柏崎地域振興局 地域整備部 維持管理課）を事業主体とする一般県道田代小国線歩道設置工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査である。事業主体者と柏崎市が委託契約を締結し、柏崎市教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した。
3. 発掘調査に関する経費は、すべて事業主体者が負担した。
4. 発掘調査における現場業務は、平成 27 年 8 月 31 日に着手し、同年 10 月 5 日まで実施した。整理業務については、現場業務終了後から本格的に着手し、平成 29 年 3 月までに本報告書を作成した。
5. 発掘調査の現場業務及び一部の整理業務等は、藤村ヒューム管株式会社 本社営業部 柏崎営業所に業務委託して実施した。これについては、柏崎市教育委員会の担当職員が監督した。
その他の業務は、柏崎市教育委員会 埋蔵文化財事務所（柏崎市西山町坂田）等において、担当職員を中心同事務所のスタッフで行った。
6. 本発掘調査で対象としたのは磯辺遺跡 B 地区であることから、出土した遺物（木製品を除く）には「イソベ B」と注記し、遺構名・グリッド・層序等を併記した。
7. 本報告書の執筆・編集はすべて伊藤啓雄（柏崎教育委員会）が担当した。
8. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会が保管・管理している。
9. 本書掲載の図面類の方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約 7 度である。
10. 発掘調査の準備段階から本書作成に至るまで、事業主体者である新潟県から様々な御理解と御協力を賜った。
また、次の機関等から多くの御助力等をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

飛岡町内会・新潟県教育委員会（順不同・敬称略）

目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	2
II 遺跡をとりまく環境	4
1 遺跡の位置と地理的環境	4
2 歴史的環境と周辺の遺跡	5
III 調 査	11
1 調査の目的と調査区の設定	11
2 調査の方法	12
IV 遺跡と遺構	13
1 概 要	13
2 各 説	14
V 遺 物	21
1 概 要	21
2 土器・陶磁器	21
3 木 製 品	21
4 環	23
VI 総 括	24
〈引用・参考文献〉	24
〈報告書抄録〉	26

図版目次

図面図版

- 図版 1 遺跡と調査区位置図
図版 2 調査区全体図
図版 3 調査区分割図
図版 4 遺構個別図・遺物

写真図版

- 図版 5 調査区全景 1
図版 6 調査区全景 2
図版 7 調査風景
図版 8 基本層序
図版 9 調査区全景 3・遺構 1
図版 10 遺構 2
図版 11 遺物

挿図目次

第1図 柏崎平野の地形分類と礎辺遺跡の位置	5
第2図 鮎石川中流域北半(中鮎石地区)のおもな遺跡	8
第3図 善根遺跡群試掘調査試掘坑配置図	11
第4図 遺構分類図	14
第5図 磯辺遺跡B地区主要遺構配置図	15
第6図 磯辺遺跡B地区SD-27木製品出土位置	20

挿表目次

第1表 磯辺遺跡B地区発掘調査体制	3
第2表 鮎石川中流域北半(中鮎石地区)のおもな遺跡	9
第3表 磯辺遺跡B地区遺構観察表	16~18
第4表 磯辺遺跡B地区柱穴列概要表	19
第5表 磯辺遺跡B地区土器・陶磁器観察表	22
第6表 磯辺遺跡B地区木製品一覧表	23

I 序 説

1 調査に至る経緯

1) 調査の原因と取扱い

磯辺遺跡は、柏崎市大字善根（飛岡）字磯辺地内に所在している。市街地から南東へ9～10kmに位置し、地形的には鶴石川中流域右岸の段丘上に立地する。現況は水田・畑地等である。

調査の原因と遺跡の発見 本遺跡において本発掘調査を実施する原因となったのは、新潟県（担当：柏崎地域振興局 地域整備部 駐持管理課）を事業主体とする一般県道田代小国線 歩道設置工事（以下、「原因工事」とする）である。既存の県道に幅2.5mの歩道を新設する工事で、善根地区において延長780mが計画されている。

当市教育委員会（以下、「教育委員会」は「教委」とする）が原因工事を把握したのは、平成22年10月20日付け教文第870号で新潟県教育庁文化行政課長から通知のあった平成23年度国・県関係機関等土木工事等状況調査による。当市教委では、同年12月21日付け教総第575号の3で事業主体者へ協議等が必要である旨を通知した。平成23年4月11日、当市教委は事業主体者から工事の説明などを受け、翌12日に現地を確認した。その結果、一部の区域から土器小片が採集されたため、未周知の遺跡が存在する可能性が生じた。そして、同月20日に事業主体者と協議し、試掘調査が今後必要であることを説明した。

その一方で、平成24～25年度に隣接する水田で県営は場整備事業に係る試掘調査が実施され、本遺跡が発見された〔柏崎市教委2015 b〕。試掘調査の対象となった区域は、今回の原因工事の施工区域に隣接しているので、直接の試掘調査は実施していないが、遺跡範囲が及んでいることが十分に考えられた。

原因工事に係る取扱い 施工区域のうち、遺跡範囲に近いのはNo15～20付近である。No15～17付近は、歩道部分全体が切土され、本遺跡に影響が生じる。そのため、記録保存目的の「本発掘調査」が必要となつた。No17～20付近も遺跡範囲に隣接するが、施工部分は遺跡の面から1～3m低い法面（段丘崖）に位置しているため、原因工事による遺跡への影響はないⁱⁱⁱ。

また、北側の始点～No15付近は、現況はおもに宅地である。歩道部分に切土は生じないが、側溝となる部分が幅1m以下の掘削を伴う。遺跡範囲が北側へ延長していた場合でも原因工事で影響が生じるのは狹小な範囲といえる。南側のNo20～終点は、鶴石川の旧河道・氾濫原であり、遺跡が所在する可能性は低い。さらに、掘削が計画されている側溝部分は、既存の側溝と一部重複しているため、新たな掘削幅は狭小となる部分が多い。

以上のことから、原因工事の施工区域のうち、No15～17付近における延長38.0m、幅3.1～4.0mが発掘調査の対象となった。

2) 本発掘調査に至る経緯

平成25年1月21日に事業主体者と協議したが、工事内容はまだ具体化されていなかったため、改めて協議することになった。また、同年11月6日、県営は場整備事業においても本発掘調査が必要となつたため、

両事業に係る発掘調査を平成26年度にあわせて実施し、調査に係る期間・費用の圧縮を図ることを協議した。以後、県営は場整備事業に係る発掘調査対象区域をA地区、歩道設置工事（今回の原因工事）に係る本発掘調査対象区域をB地区として両事業主体者と協議を進めていった。しかし、平成26年5月20日、A地区の事業計画が変更となったことに伴い、本発掘調査の時期も変更となったので、これについてB地区的事業主体者と協議した。同年9月24日、本発掘調査の実施時期を平成27年度とし、A・B地区的両事業主体者と具体的な協議を行い、3者で準備を進めていった。

平成27年5月26日、原因工事（B地区）の詳細について説明を受け、改めて取扱いを確認したところ、前項で述べたとおりとなった。事業主体者からは平成27年5月22日付け柏振地第124号で文化財保護法第94条等に基づく通知が提出されたので、当市教委では一部の区域において本発掘調査が必要である旨の意見を付し、同月28日付け博第526号の2でこれを県教委へ送付した。県教委からは、6月8日付け教文第256号で本発掘調査の実施について通知があったため、同月11日付け博第526号の5で事業主体者へこれを伝達した。

その後、本発掘調査の実施に係る手続を進め、平成27年度に現場業務を実施し、平成28年度に報告書を刊行して完了する計画とした。これについては、7月7日付け柏振地第195号で事業主体者から埋蔵文化財（磯遺跡）発掘調査およびその整理業務に係る覚書の締結が協議されたので、当市教委では同月8日付け博第555号の2で異存ない旨を回答し、締結となった。

また、6月19日、本発掘調査の具体的な方法などについて、両地区的事業主体者と協議した。そして、本発掘調査の実施にあたり、市教委では調査支援業務を民間の専門業者へ業務委託することとした。平成27年8月11日付け博第559号で県教委教育長へ文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手を報告し、後述するように本発掘調査は8～10月に行った。

3) 調査体制

平成27年度に実施した現場業務・整理業務から翌平成28年度の報告書刊行に至るまでの調査体制は、第1表のとおりである。

2 発掘調査の経過

1) 平成27年度（現場業務・整理業務）の経過

発掘調査は、平成27年度に現場業務を実施し、終了後に整理業務を進めた。翌平成28年度は引き続き整理業務を行い、報告書を刊行した。

現場業務 前述のとおり、現場業務はA地区の調査と日程を調整しながら実施し、平成27年8月31日～同年10月5日の間に延べ11.5日間で行った。調査担当を含む調査員は延べ130人、調査補助員は延べ70人、発掘作業員は延べ420人を要した。期間中は雨天が多く、晴天は数日しかなかった。現場業務は、発掘調査支援業務委託契約を締結した後、事前準備を開始した。8月3・4日、受託業者と打合せを行い、現場での準備も進める。調査事務所や作業員休憩所・駐車場などはA地区的調査における仮設を共用する。

8月31日、前日にA地区的表土掘削が終了したので、引き続きB地区を行うこととした。南端から北側へ向かって掘削を進めたが、1日で終了したので、発掘作業員により調査区壁の整形や土養作りを行った。9月3日、この作業を継続した。

調査主体	柏崎市教育委員会 教育長 大倉政洋（～平成27年10月29日） 本間敏博（平成27年10月30日～）	
年度	平成27年度	平成28年度
業務	現場業務・整理業務	整理業務
所管	博物館 埋蔵文化財係	
総括	猪俣哲夫（教育部長） 力石宗一（館長）	田村光一（館長）
監理	小池繁生（館長代理兼係長）	多田利行（館長代理兼係長）
庶務	重住千夏（非常勤職員）	
調査担当	伊藤啓雄（主任・学芸員）	中島義人（主査・学芸員）
調査員	雜 実（受託業者） 阪田友子（非常勤職員）	伊藤啓雄（文化学芸係主任・学芸員） 阪田友子（非常勤職員）
調査補助員	加藤章恵・吉浦啓子 (埋蔵文化財事務所パート職員)	
発掘作業員	受託業者	
整理補助員	白川智恵 (埋蔵文化財事務所パート職員)	

※受託業者（平成27年度 発掘調査支援業務）

藤村ヒューム管株式会社 本社営業部 柏崎営業所（現場世話人：丸山 薫）

第1表 碓波遺跡B地区発掘調査体制

8日、朝方の降雨が止み、作業が可能となった。この日から、A地区と並行してB地区も遺構確認を行うこととした。北側から進めていき、ピットや溝などを確認した。また、調査区外周を測量する。9日、台風18号の接近により、曇・晴と雨が断続的に繰り返された。調査区中央の遺構が多い区域から遺構発掘に着手した。10日、遺構発掘を継続する。SKP-34などは断面処理も進めた。しかし、午後から雨天となり、夕方前に中止とした。11日、断続的な降雨の中、遺構発掘を続ける。調査区中央の溝跡などについても覆土の観察を行った。14日、やはり朝方は雨天であったが、次第に晴天となった。SKP-42の底部で検出された疊などを撮影した。15日、着手以来で初めての晴天日となった。遺構がすべて完掘したので、全体撮影を行った。16日、引き続き晴天となり、基本層序を確認し、発掘はおおむね終了となった。その後、事業主体者と調査区の引渡しについて打合せをする。17日、雨天となったが、遺構測量を行った。18日、再び晴天となった。遺構測量が終了する。23日、遺構平面図を校正し、柱根などを回収した。

10月1日、調査区引渡しのため、遺構を人力で埋め戻し、フェンスや機材等を撤収した。5日、重機で調査区全体を埋め戻し、現場での調査は終了とした。10月9日付け博第594号で事業主体者へ調査区の引渡しを通知し、10月15日付け博第559号の2で県教委へ終了を報告した。

整理業務 現場業務終了後、遺構・遺物の量などをもとに発掘調査の全体計画を見直し、事業主体者と協議した結果、平成27年度は、本文の一部を除く発掘調査報告書（本書）の原稿作成を進めていくことになった。そして、平成28年2月までに遺構・遺物の図面図版・写真図版を作成した。

平成28年度は、本文作成の継続と印刷製本を行い、予定どおり平成29年3月に発掘調査報告書（本書）を刊行して調査を完了することができた。

【註】 この付近については、後述する県営は場整備事業に係る発掘調査（A地区）の対象区域である。報告書として『碓波II』〔柏崎市教委2017〕を刊行する。

II 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置と地理的環境

本遺跡は、柏崎市大字善根地区にある。柏崎平野南東部の沖積地にあたり、2級河川鯖石川中流域の右岸に位置する。ここでは、まず柏崎平野を概観した後、遺跡周辺の地形をまとめたい。

柏崎平野概観 新潟県の中央部は中越地方と呼ばれている。中越は、標高1,500m級以上の連山が続く東側と、河川や海岸に沿って発達した段丘・平野がみられる西側に区分されるが〔小林ほか2008〕、柏崎平野は西側の一部となる。柏崎平野は、鯖石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野であり、各河川は個々に独立した水系を持っている。そして、信濃川水系の越後平野や関川水系の頭城平野とは丘陵や山塊による分水嶺によって隔されており、ひとつの独立した平野を形成している。

柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、東頭城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鶴川・鯖石川によって西部・中央部・北～東部に3分され、それぞれ米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、現在も隆起を続けているといわれる。これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸にまで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成する。米山海岸の景観は、沿岸部に低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著であり、沖積地は少なく、海辺は漂石海岸で、砂浜もほとんどみられないことが特徴となっている。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い沖積地が広がっている。北～東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西方向に流れ出る。

平野の地形は、中・上部更新統～完新統からなる段丘、多くが地下に埋没した上部更新統からなる古(旧期)砂丘のはか、更新統の最上部～完新統からなる河道・旧河道・自然堤防・後背湿地・新砂丘などに区分される〔柏崎平野団体研究グループ1979〕。日本海に洗われる北西部は海岸に沿って荒浜砂丘・柏崎砂丘が横たわり、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鶴川・鯖石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

なお、柏崎平野には、柏崎市のほかに刈羽郡西山町・同郡刈羽村・同郡高柳町が所在したが、平成17年5月に西山町・高柳町が柏崎市に合併したため、現在は別山川流域の一部に刈羽村城がある以外は、柏崎市域が大半を占めている状況である。

鯖石川中流域と遺跡周辺の地形 本遺跡が位置する善根地区は、鯖石川中流域の右岸にあるため、前述した柏崎平野の地形区分では北～東部に含まれる。鯖石川は、鶴川とともに柏崎平野の二大河川のひとつとされるが、総延長は約48.1kmで、約24.6kmの鶴川よりも長いため¹⁾、柏崎平野では最大の河川といえる。鯖石川は、下流域に至って著しく蛇行し、広い沖積地と多くの自然堤防を形成する。一方、上・中流域では黒姫山・八石山に連なる丘陵に河岸段丘を形成し、顕著な発達をみせる。中流域とは、おおむね西ノ入川との合流点から長鳥川合流点までの地域で、延長は南北方向に約8km、沖積地の幅は東西方向に約1kmの規模である。東西の両岸に河岸段丘が形成されているが、これらを開析する沢もみられる。



第1図 柏崎平野の地形分類と磯辺遺跡の位置

本遺跡が位置する善根地区は、中流域の北端から2~4km上流側にある。東側の八石山丘陵から久之木川・石川が西側へ流れて鰐石川に合流する。善根地区には、北側（下流側）から久之木・飛岡・佐之久・石川・久木太の各集落があるが、本遺跡は久之木川左岸にあたる飛岡集落の南西側に位置する。現在の飛岡集落は標高26~30mを測る丘陵裾部に展開しており、西側一帯は水田となっている。水田域には鰐石川の旧流路・氾濫原がみられ、顕著な段丘地形を観察することができる。すなわち、集落域に連なる段丘面は、標高19m前後の河川付近からは1段高い地形となっている。遺跡は蛇行・湾曲によって半島状・舌状となった段丘の突端部で発見されており、集落北西部では善根大坪遺跡、南西部では磯辺遺跡が立地していることがわかった。いずれも標高26m付近である。同様の立地としては、鰐石川の対岸である加納地区的上加納遺跡【柏崎市教委2014】、さらに上流側にある石曾根地区的深町遺跡・片畠遺跡・中村遺跡【柏崎市教委2001】にて古代～中世の遺跡が発掘調査されている。

2 歴史的環境と周辺の遺跡

1) 柏崎平野における歴史的環境（古代）

今回の調査区からは、おもに古代の遺物が出土しているため、この時期における歴史的環境について概観しておきたい³⁾。

越後国を含む古代北陸道の諸国は、それまでの越国が分割されて成立したが、それは天武12~14年(683~685)段階であった可能性が指摘されている【相澤2007】。成立当初の越後国とは現在の阿賀野川以北の地であり、現柏崎市域等は越中国に属していた。現在のような越後国の国域は、大宝2年(702)に越中国の4郡（蒲原・古志・魚沼・頸城）が越後国へ分割され【米沢1976】、和銅5年(712)に出羽国が分置・独

立して確定されることとなった。

奈良時代の柏崎市・刈羽郡域は、柏崎市西部の旧頸城郡域や魚沼郡域であった旧刈羽郡小国町域（現長岡市）などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡域に属していた。当時の古志郡は、長岡市（旧三島郡和島村）八幡林遺跡の調査成果等から、鳥崎川流域の同遺跡付近に郡衙等の中枢部が所在したことが想定できる〔和島村教委1994ほか〕。ただし、この地域と柏崎平野とは、低いながら分水嶺を間に挟み、地理的な隔たりがみられるが、郡の大領と少領がそれぞれの地域を専門的に担当していたとする説もある〔相澤1998〕。その後、柏崎平野一帯は9世紀前葉に三嶋郡として分置・独立したとされている〔米沢1980〕³。なお、三嶋郡の中心は箕輪遺跡付近と考えられるが〔新潟県教委ほか2015〕、出土した木簡などにより、郡衙的施設と駅家は近接していたとの考察がある〔中2003〕。

三嶋郡内の郷としては、承平年間（931～938）成立の『倭名類聚鈔』に、「三嶋」・「高家」・「多岐」の3郷が記されている⁴。また、延長5年（927）に完成した『延喜式』には、兵部省の諸国駅伝馬に北陸道の越後国駅馬として「三嶋」と「多太」がある⁵。これら2史料に記された地名や記載順あるいは式内社などの分布からすれば、三嶋駅は三嶋郷に、多太駅は多々神社などがある別山川流域の多岐郷内に推定される。そして、のちの莊園分布などを参考とすれば、鶴川流域に三嶋郷、鯖石川中流域および長鳥川流域に高家郷、別山川流域に多岐郷をおおまかに想定できる。

柏崎平野における古代の遺跡は、その多くが平安時代の遺跡である。別山川流域の複数遺跡で古墳時代中・後期の遺跡が複合している例があるものの、奈良時代の遺跡は発見例が少ない。奈良時代の遺構・遺物が確認されているのは、箕輪遺跡〔新潟県教委ほか2015〕、音無瀬遺跡〔柏崎市教委2012・同2013〕、萱場遺跡〔柏崎市教委1985a・同1990〕・戸口遺跡〔柏崎市教委1990〕、刈羽大平遺跡〔柏崎市教委1985b〕のほか、後述の製鉄遺跡などが知られている程度である。また、平安時代については、全国的な傾向として9世紀中葉～後半に遺跡数が増加するが、柏崎平野の動向も基本的に同じで、河川流域に発達した自然堤防などに集落遺跡が展開するようになる。このほか、鶴川流域の藤橋・軽井川・堀付近の丘陵では、軽井川南遺跡群・藤橋東遺跡群といった製鉄遺跡が展開する。最古の製鉄遺構は、下ヶ久保D遺跡の長方形箱型炉で、8世紀後半である〔柏崎市教委2010〕。

2) 善根地区的歴史と周辺の遺跡

次に、関係する資料などから、善根地区的歴史について概観しておきたい。周辺の遺跡については、第4図・第2表にまとめたので参照されたい。

古代以前 南条・加納・宮平の各地区で繩文中期・同後期・弥生後期といった遺跡の分布を確認することができるが、今のところ善根地区では確認されてはいない。

古代の善根地区は、三嶋郡高家郷の比定地（前項）に近いが、その様相は不明とせざるを得ない。しかし、本遺跡や善根大坪遺跡から古代の遺物が出土しているように、南条・加納・与板・宮平地区においても河岸段丘にて古代の遺跡が存在している。また、上流側の石曾根地区では、それぞれ9世紀後半・10世紀前半の集落である宮田遺跡・深町遺跡が展開している〔柏崎市教委2001〕。これらの遺跡の存在からは、鯖石川中流域における平安時代前期の開発状況を推測することができよう。しかし、その後は資料の空白期となる。

中世 中世の善根地区は佐橋荘に属し、鎌倉期以降には越後毛利氏のもとで開発が進められたと推測されるが、具体的な様相については明らかではない。善根の初見史料は天文24年（1555）2月3日の「本

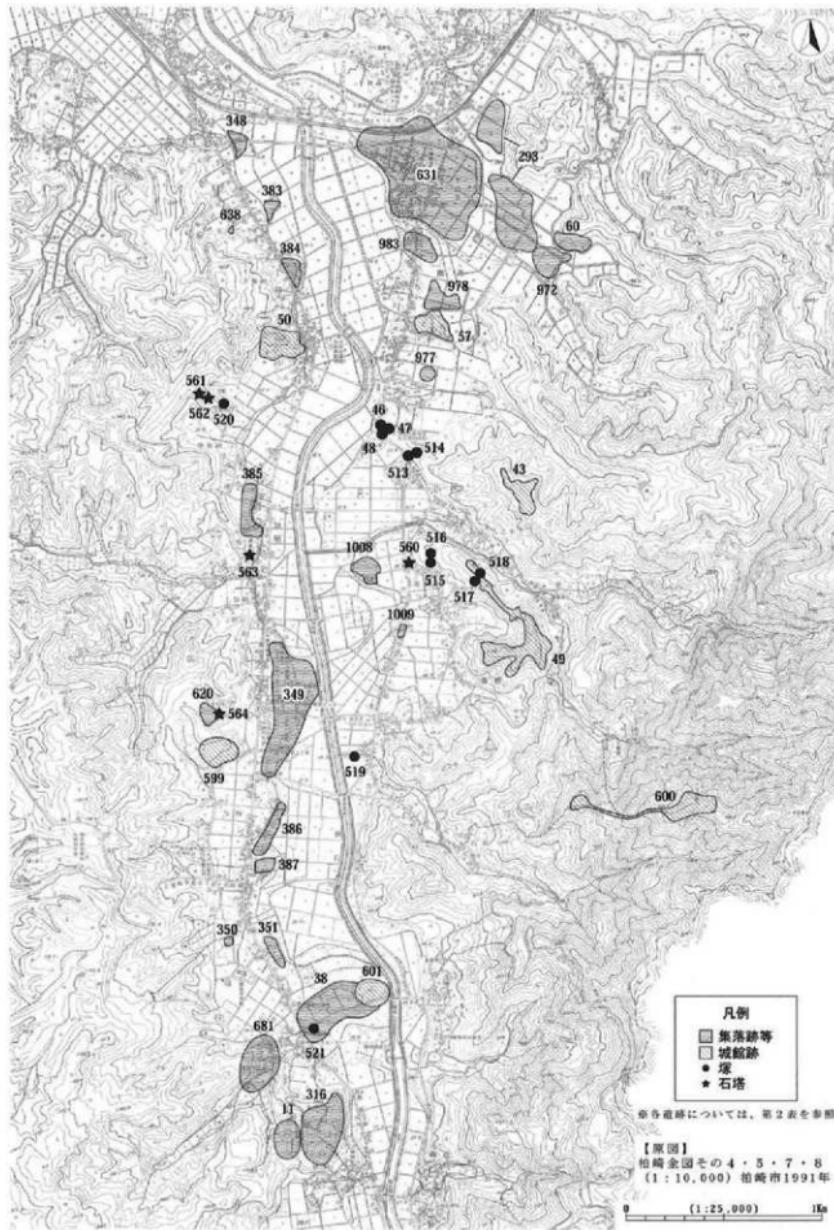
庄宗綏・直江実綱・大熊朝秀連署起請文⁹である。佐橋莊と鶴河莊において係争が生じたために長尾宗心（上杉謙信）が善根に出陣したもので、「善根之一儀」とされている¹⁰。また、同時代資料にはみられないが、「越後名寄」・「白川風土記」といった近世の資料には、戦国期における善根地区の領主として、毛利大万之助（允）・淨広・周広といった人物がみられ、さらに八石（善根）城主が北条城主に殺害されたとの事件を伝えている。『中嶋石村史』では、天正年間に八石城主の毛利大万之助淨広が北条城主の毛利丹後守に殺害され、淨広の一族である与板城主の毛利周広も自刎したとする〔柏崎郷土資料刊行会1979〕。これについては地元でも研究がなされているが〔中嶋石郷土史クラブ1993など〕、いずれにしても善根を含む中嶋石地区・北条地区において、この時期に何らかの緊張関係があったことがうかがえる。また、淨広寺（善根）・周広院（与板）はそれぞれ淨広・周広に関わる開基伝承がある。

その後、謙信没後に生じた御館の乱（1578～79年）は善根にも波及した。天正7年（1579）2月27日の山崎秀仙書状（上野文書）¹¹には、北条城に攻め寄せる景勝方が大伏（十日町市）から北上して「善根表」までに迫っている戦況が記されている。そして、翌天正8年（1580）7月26日の「上杉景勝知行宛行状写」（桜井氏所蔵文書）¹²によれば、景勝は善根を宇野民部少輔に宛行している。

中世の遺跡は、やはり河岸段丘に立地するものが多い。また、丘陵上には越後毛利氏との関わりが伝わる山城が分布する。特に、飛岡集落南東側には善根冬城跡（善根城跡 49）があるが、周辺には「御屋敷」・「馬隠」・「樹形」・「ちん」・「城裏（じょうぶら）」といった地名・俗称がある〔中嶋石郷土史クラブ編1989〕。また、八石城跡（善根城跡 600）にみられる横堀や、善根冬城跡の畝形堅堀・連続堅堀などは越後毛利氏の山城に共通する遺構で、畝形堅堀や連続堅堀は1530～50年代、横堀や箱堀形態は御館の乱（1578～79年）頃に北条毛利氏が採用して整備していったと考察されている〔鳴海2002〕。その他、五輪塔や宝篋印塔といった石造物や塚などもあるが、詳細な時期は不明である。

近世 『中嶋石村史』によれば、善根村は坂野下・久野木・飛岡・佐之久・太野田・石川・久木太の7か村が合併したものとある〔柏崎郷土資料刊行会1979〕。また、新発田市立図書館蔵「正保越後國絵図」（1645年）には、久木太村（91石余）・佐野久村（290石余）・飛岡村（110石余）・久野木村（345石余）・太ノ田村（50石余）・石川村（136石余）が記載されている（合計1,022石余）。これが、延宝7年（1679）の「越州四郡信州逆木郷高帳」には、谷（善）根村として1201石余とある¹³。したがって、この間に支配者側からは善根村として把握され始めたようであり、近世初頭には分村していたものが、戦国期の支配関係や地域性をもとに一村になった例とみられる〔新沢1990〕。ただし、高野山清淨心院蔵「越後国供養帳」をみると、供養の依頼者として元和3・4年（1617・18）に「カリハ郡サバシノ庄セゴンノ内石川村弥三郎」、寛永9年（1632）に「越後カリワ郡セコン村中村弥三」がある〔山本ほか2004〕。1645年の「正保越後國絵図」では分村しているにもかかわらず、「越後国供養帳」では1632年の段階ですでに善根村となっているのである。前者は支配者側が作成した資料であるが、後者は在地の被支配者の意図が反映された資料と考えられるので、支配者側が把握する内容と在地の実態や被支配者の意識には違いがあった可能性がある。その後の石高は、天和3年（1683）の「越後中将光長公御領帳」に1,079石余、元禄15年（1702）の「越後国郷帳」に1,188石余、天保5年（1834）の「越後国郷帳」に1,253石余とある¹⁴。

支配者は、上杉氏が移封された慶長3年（1598）からは、まず春日山城に入った堀秀治となった。以後、慶長12年（1607）から福島藩（堀秀治・忠俊）領、慶長15年（1610）から福島藩（松平忠輝）領、慶長19年（1614）から高田藩（松平忠輝）領となる。元和2年（1616）、松平忠輝は改易となり、柏崎地域は高田藩（酒井氏）領・長嶺藩（牧野氏）領・藤井藩（稻垣氏）領・長岡藩（堀氏）領・椎谷藩（堀氏）領に



第2図 銀石川中流域北半（中銀石地区）のおもな遺跡

No	種別	名称	所在地	時代	内 容
11	集落跡等	十二沢遺跡	宮平	縄文	調査工事による小形文(中期前葉)や擦革文、石器には石器や蛇形骨製の磨製石斧がある〔昭和1987〕。なお、小形文に土器焼成跡があると記載されている。
35	集落跡等	秋里遺跡	宮平	縄文・弥生・古墳・中世	田石や須恵器片〔森藤1997〕が採集されている。また、平成20年度の発掘調査では、調査工事による土器焼成跡があると記載されている〔柏崎市教委2016〕。
60	集落跡等	酒曲長者屋敷遺跡	南条	中世	土地改良工事の廃石、瓦石・土器片が発見された。
293	集落跡等	龜ノ倉遺跡	北条	古墳・古代・中世	平成20年度の発掘調査の結果から、古墳前期前葉では半床的な重落とみられる〔柏崎市教委2011〕。
316	集落跡等	新平遺跡	宮平	縄文はかく文化・古代	調査工事による土器焼成跡があると記載されている。
348	集落跡等	加納下川原遺跡	加納	古代・中世・近世	平成7年度の発掘調査から、中世前半において交通の要衝となっていたことが推測される〔柏崎市教委2003〕。
349	集落跡等	上野原遺跡	加納	古代・中世	平成25年度の発掘調査では、14~15世紀の遺構・遺物が見られた。中世薬草の一帯とみられる〔柏崎市教委2014〕。
350	集落跡等	谷内田遺跡	与板	古代・中世	聚落跡や中世薬草と思われる遺物が採集されている。
351	集落跡等	東大通院	宮平	古代	土器焼成跡が見込まれている。
352	集落跡等	佐野新村	加納	中世	土器焼成跡が見込まれている。
354	集落跡等	庄吉遺跡	加納	中世	土器焼成跡が見込まれている。
355	集落跡等	川上千ばたけ遺跡	加納	中世	調査工事による土器焼成跡が見込まれている。
356	集落跡等	久保田遺跡	与板	中世	調査工事による土器焼成跡が見込まれている。
357	集落跡等	久保井遺跡	中条	中世	中世薬草が見込まれている。
620	集落跡等	東広院遺跡	与板	縄文	土器の先端部から、調査工事による石片が多量に出土した〔平成8・高橋1997〕。
631	集落跡等	馬場・天神原遺跡	南条	古代・中世	平成3~4年の発掘調査では、12世紀末~16世紀初の遺物が出土し、道路遺構と区画の状況から6郡的な性質を持った集落と推測されている〔品田1997〕。また、平成20年度の発掘調査では、おもに古墳の遺構・遺物が見出された〔柏崎市教委2011〕。
638	集落跡等	下加納遺跡	加納	中世	多くの塚が散在しているが、このうちの1.5mほどの塚を取り崩した際に弥生縄文の壺が出土した〔平尾美・原井1987〕。
661	集落跡等	山王前遺跡	宮平	古代・中世・近世	平成9年度の発掘調査では、古代・中世・近世の遺構・遺物が調査された〔柏崎市教委1998〕。
972	集落跡等	小浦遺跡	南条	近世	平成17年度の試掘調査では、古墳前期を中心に古代・中世などの遺物が出土した〔柏崎市教委2006〕。
977	集落跡等	古畠敷遺跡	南条	古墳	平成18年度の試掘調査において、土石流の堆積層で覆われた遺物包含層から、古墳中期の土器や高杯が出土した〔柏崎市教委2008〕。
978	集落跡等	城ノ腰遺跡	南条	縄文・古代・中世・近世	調査・古代の土器類・須恵器・中世の青磁胎・中世土師器が出土した。出土量としては、古代の土器が多かった〔柏崎市教委2008〕。
983	集落跡等	六角遺跡	南条	古代	平成19年度の試掘調査において、須恵器長縄目・土師器柄・筒長甕の破片が出土した〔柏崎市教委2008〕。
1008	集落跡等	新横大坪遺跡	善根	古代・中世	平成25年度の発掘調査では、古代・中世の遺物が出土した〔柏崎市教委2015a〕。
1009	集落跡等	礎辺遺跡	善根	古代・中世	平成27年度の発掘調査では、古代・中世などの遺構・遺物が見られ、古代薬草の一部が確認された〔柏崎市教委2017・木島〕。
43	城跡	小幡城跡	善根	中世	土壘・櫓門・基壇・地形整備などがある〔山崎1984・鳴海2002〕。城跡の一部に浮舟寺が立たたるという。南側の水門には複数の形式表示する遺構があつたが、土地改めて消滅した。付近は「朝屋跡」とされ、西面に毛利浮舟(善根毛利元)に隣接する浮舟寺がある。北側斜面の尾根に、土壘・櫓切・堅堀・地形整備・土壘・虎口などがある〔山崎1984・鳴海2002〕。
49	城跡	善根新攻城	善根	中世	土壘・櫓切・堅堀・虎口などがある〔山崎1984・鳴海2002〕。北条毛利氏や善根毛利氏との関わりが伝わる。
50	城跡	加納城跡	加納	中世	「南条毛利城跡」といはゆる。土壘と思われる遺構がある〔鳴海2002〕。
57	城跡	南条城跡	南条	中世	遺構は未だらかである。「小門口」・「道手」の地名がある。善根毛利氏との関わりが伝えられる〔「善根毛利城跡」といはゆる。〕
59	城跡	与板城跡	与板	中世	土壘・櫓切・堅堀・地形・虎口などがあり、百瀬の先端に「八石小城跡」と呼ばれる塀がある〔新潟県立歴史博物館等学術会議クラブ開催1976・山崎1984・鳴海2002など〕。毛利大万代(善根毛利元)の虎口である。
600	城跡	八石城跡(善根城跡)	善根	中世	平成13年度に施設が発掘調査されている〔報告書未刊〕。文安年間に足利氏の臣である秋野玄蕃・吉治助・伊賀助・元助の四兄弟が立派な城郭を築いたといわれる。
601	城跡	官平城跡	宮平	中世	官平城跡は、上杉氏の臣である中澤太郎左衛門との間わりが伝えられている〔柏崎市教委2016〕。
46	塙	久之木の塙跡1号塙	善根	不明	円形で、15cm×10cm、高さ5cmを測る。
47	塙	久之木の塙跡2号塙	善根	不明	円形で、20cm×10cm、高さ3cmを測る。
48	塙	久之木の塙跡3号塙	善根	不明	円形で、8cm×8cm、高さ2cmを測る。
513	塙	久之木の塙跡4号塙	善根	不明	円形で、15cm×10cm、高さ5cmを測る。
514	塙	久之木の塙跡5号塙	善根	不明	円形で、5.5cm×5.5cm、高さ3cmを測る。
515	塙	善根松葉の塙跡1号塙	善根	不明	円形で、5.2cm×5.0cm、高さ1.3~1.6cmを測る。
516	塙	善根松葉の塙跡2号塙	善根	不明	円形で、4.5cm×3.4cm、高さ0.7cmを測る。
517	塙	善根松葉の塙跡3号塙	善根	不明	円形で、4.5cm×3.4cm、高さ0.7cmを測る。
518	塙	善根神明社裏山の塙跡1号塙	善根	不明	円形で、3.8m×3.1m、高さ0.6mを測る。
519	塙	十一神社の塙	善根	不明	円形で、6.5m×4.7m、高さ3.0mを測る。
520	塙	免賀寺の大塙	加納	不明	円形上にねじの木(市指定文化財)があり、一方に小さい埴丘(2.8m×2.4m)がある。
521	塙	宮平の塙	宮平	不明	円形で、底3m、高さ1mを測る。
560	石塙	船岡大伴のダイラ出上の宝鏡印塔	善根	中~近世	墓塙のみである。船岡西方で大きく現行している船石右岸の庄丘(善根大坪善根材窓)から出土したといわれる〔柏崎市教委2015b〕。
561	石塙	免賀寺の宝鏡印塔	加納	中~近世	免賀寺の寺領塙にあった寺から移転したといわれている。
562	石塙	免賀寺の五輪塙	加納	中~近世	免賀寺の寺領塙にあった寺から移転したといわれている。
563	石塙	免賀寺の五輪塙	加納	中~近世	免賀寺の寺領塙にあった寺から移転したといわれている。
564	石塙	庄丘跡の五輪塙	加納	中~近世	庄丘跡の寺領塙にあった寺から移転したといわれている。

※ 参考文献の記載がない場合は、新潟県権威文化財包蔵地カードの記載に基づいています。

第2表 鮫石川中流域北半(中嶋石地区)のおもな遺跡

分割された。近隣の加納村・与板村・宮平村は長嶺藩〔柏崎郷土資料刊行会1979・新潟ほか1990〕あるいは藤井藩〔新潟1990〕に属したと考えられる一方、善根村は幕府領〔柏崎郷土資料刊行会1979〕あるいは長嶺藩〔新潟ほか1990〕になったとされる。その後、柏崎地域の多くは元和4年（1618）から高田藩（松平忠昌）領¹⁰、寛永元年（1624）から高田藩（松平光長）領となるが、善根村は幕府領のままである。延宝9年（1681）、高田藩は改易となり、幕府領となった。

その後、再び柏崎地域の大半は高田藩領となり、貞享3年（1686）から稻葉氏、元禄14年（1701）から戸田氏、宝永7年（1710）から松平氏（久松松平氏）が藩主となった。同氏は、寛保元年（1741）に白河藩、文政6年（1823）に桑名藩に移封され、幕末へ至る。しかし、一部を除く善根村は諸藩領となることなく、引き続き幕府領であったとされる。1742年（寛保2）と宝曆10年（1760）に半田村の陣屋に関する資料が残されているが、いずれにも善根村の庄屋が連名しており、半田・新田畠・軽井川・佐藤池新田・石曾根・大河内新田とともに中村羽組とされ、長岡藩の預所とされている¹¹。

近世の柏崎地域にあった村の状況は、19世紀初頭に白河藩が編纂した『白川風土記』〔柏崎市立図書館編1977〕に詳しいが、善根村は同藩領とはならなかったため、記載がない。明和8年（1771）の「越後国刈羽郡善根村明細帳」によれば、家数229軒、人口1,025人うち男487人・女516人・出家8人・山伏1人・道心11人・座頭2人・女馬31匹などが記載されている〔柏崎郷土資料刊行会1979〕。

そして、善根村は明治22年（1889）に刈羽郡善根村、明治34年（1901）に刈羽郡中野石村大字善根、1957年（昭和32）に柏崎市大字善根となり、現在に至る。

【註】

- 1) 各河川の延長は、新潟県の「鶴川水系河川整備基本方針」（平成15年5月）及び「鶴石川水系河川整備計画」（平成18年6月）による。
- 2) 以下、本節は既刊報告書である「善根大坪」〔柏崎市教委2015 a〕などをもとに作成した。
- 3) 桑原正史氏は、三崎郡の成立年次は863年5月～871年8月までとする。ただし、同氏も述べておられるように、八幡林遺跡出土資料との整合が必要である〔桑原2007〕。
- 4) 『新潟県史』資料編2〔新潟県1981 a〕所収392～394。及び『柏崎市史資料集』古代中世篇〔柏崎市史編さん委嘱1987〕所収4～6。
- 5) 『新潟県史』資料編2〔新潟県1981 a〕所収438及び『柏崎市史資料集』古代中世篇〔柏崎市史編さん委嘱1987〕所収13。
- 6) 『新潟県史』資料編4〔新潟県1983〕所収1571及び『柏崎市史資料集』古代中世篇〔柏崎市史編さん委嘱1987〕所収231。
- 7) 北条高広が武田信玄に内通して上杉謙信に謀反をしたことへの対応とされていたが、根拠となる史料の年次比定が見直されている〔猪爪1996など〕。なお、「善根一族」の詳細は不明だが、当時の善根に一定の勢力を持つ者が存在していた可能性が指摘されている〔猪爪1996〕。
- 8) 『越佐史料』卷五〔高橋編1971〕及び『柏崎市史資料集』古代中世篇〔柏崎市史編さん委嘱1987〕所収425。
- 9) 『新潟県史』資料編5〔新潟県1984〕所収2763及び『柏崎市史資料集』古代中世篇〔柏崎市史編さん委嘱1987〕所収443。
- 10) 『新潟県史』資料編6〔新潟県1981 b〕所収1-35。ただし、のちの時期の石高よりも多い値となっている。
- 11) 『新潟県史』資料編6〔新潟県1981 b〕所収付表及び『柏崎市史』〔新潟ほか1990〕による。
- 12) 松平忠昌の入封については、元和4年説と元和5年説があるが、新潟住氏は前者を探っている〔新潟1990〕。
- 13) 『新潟県史』資料編6〔新潟県1981 b〕所収1-38・39。また、『柏崎市史』〔新潟ほか1990〕による。

III 調査

1 調査の目的と調査区の設定

本遺跡の範囲は、平成24年度の第1次試掘調査、平成25年度の第2・3次試掘調査の結果をもとに推測した〔柏崎市教委2015 b〕。すなわち、遺構・遺物が検出されたTP1-47・TP2-01・TP2-02・TP2-14の周辺が遺跡範囲と考えられる。

今回実施した本発掘調査の目的は、本遺跡の範囲のうち、原因工事で影響が生じる区域について記録保存を行うことである。したがって、遺跡範囲内において歩道の設置に伴って掘削される区域が調査区として設定される。その位置は、前述（第I章第1節）のとおり現道に接する遺跡範囲の北西部で、延長約34m、幅2~3mの範囲となる。



第3図 善根遺跡群試掘調査試掘坑配置図

2 調査の方法

今回の本发掘調査を実施するにあたっての方法を記載する。具体的には、おもに次の事項について述べておきたい。

グリッドの設定 調査区の位置表示には、国家座標に基づいたグリッドメッシュを使用した。グリッドは、大グリッドを1辺10mとし、小グリッドを1辺2mとして大グリッドを25分割する。大グリッドの列は東西方向に西からA・B・C…のアルファベット、南北方向に北から1・2・3…の算用数字を用い、各グリッドの北西隅を基点として名称を「A1グリッド」等とした。これにより、調査区はB2・B3・B4・C1・C2・C3の各グリッドに及んでいることとなる。小グリッドは大グリッドの北西隅を01として東に向かって北東隅を05、南西隅を21、南東隅を25とし、名称は大グリッド名の後に続けて表記して「A101グリッド」等とした。グリッドの基点と座標との関係は、C2: X = 145520.000 Y = 11570.000)、C4: X = 145500.000 Y = 11570.000である。

表土除去 表土除去には重機を使用した。重機は0.25m³級のバックホーで、法面パケットを装着した。作業は調査員の指示に従い、遺物が出土した場合は調査員が取り上げた。廃土は、調査区に隣接する用地に集積した。また、遺物包含層からは遺物の出土が少なかったため、遺構確認面まで重機で掘削した。表土剥ぎが終了した部分と調査区壁には、乾燥や汚れなどを防止するため、ブルーシートをかけておいた。

遺構確認・遺構発掘 遺構確認では、人力で表面を削っていったが、地山土層が帶びる粘性のため、大型のジョレンより小型のミニジョレンが有効であった。

確認された遺構は、柱穴・ビット・土坑・溝がある。溝以外の発掘にあたっては半截を行うが、柱穴・ビットでは平面形態の長軸方向をもって区切り、その両側をはじめに発掘した。長軸方向で半截することにより、柱痕部や柱掘方部をより確実にとらえることを意図した。溝については、適宜ベルト及びサブトレンチを設け、断面を確認しながら発掘した。

発掘した遺構は、遺構カードに内容を記載したが、主要な遺構は土層断面図などについても適宜作成していく。また、調査区の基本測量や遺構の実測等は、業務委託により実施した。遺構実測は、トータルステーションと電子平板を使用する。

遺構写真撮影 現場業務においては、調査員による手持ちや三脚により遺構等を撮影した。撮影には、白黒35mmフィルム（フジカラー NEOPAN ACROS100）・カラーリバーサル35mm（フジカラー PROVIA 100F）のほか、デジタル一眼レフカメラ（NIKON D700 1,690万画素）を使用した。

整理業務 現場業務の後半段階から遺物の洗浄・注記・接合といった基礎整理を開始した。注記にあたっては、遺跡名・地区名から「イソペB」と表記し、出土した遺構や位置（グリッドについては前述）等を併記した。

遺物の実測作業は、遺物の量も反映できるよう、土器・陶磁器の口縁部や底部を伴う場合は、小さい破片でも対象とした。ただし、近代以降と判断される木製品（柱痕など）も多く出土したが、図化や撮影の対象から除外した。

土層断面図や遺物実測図は、業務委託によりデジタルトレースし、図面図版を作成した。また、遺物の撮影についても、業務委託により行った。使用したのは、デジタル一眼レフカメラ（ニコン D700 1,690万画素）である。

IV 遺跡と遺構

1 概 要

1) 遺跡の概要と遺構の分布

本遺跡は、柏崎市大字善根（飛岡）字磯辺地内に位置する。地形的には鷹石川中流域右岸にあり、同川が形成した河岸段丘の段丘面突端部付近に立地する。調査前の現況は、段丘面を利用した水田・畠地などであった。現道に接している調査区の西辺は、道路面よりも標高が高い。地山土層を検出させると、2~4グリッド付近が法面となっているが、道路改良の際に掘削を受けたものと考えられる。遺構確認面の標高は25.1~25.2mを測る。調査区内で遺構と判断されたのは、最終的に合計53基となった。出土遺物から、時期は古代および近世以降と推測される。

遺構を種別にみると、柱穴・ビット46基、土坑3基、溝4条である。柱穴・ビットが大半を占めるが、柱穴のうち16基は4本の柱列を構成する。調査区内での分布は、密度に差がみられる。北側の1グリッド南半~2グリッド北半は、柱列2本とビット・土坑が散見される。2グリッド南半~3グリッド北半は、おむね東西方向の溝が4条あり、周辺に柱穴・ビットが分布する。3グリッドには、柱列が1本あるほか、古代のビット・土坑を含んだ遺構が比較的多くみられる。しかし、南端の4グリッドでは、稀薄な分布となる。

2) 基本層序

基本層序は、遺構確認面までの深度が比較的大きい調査区南東部のB3-25グリッド(①)・B4-14グリッド(②)の2か所において、いずれも調査区東壁を利用して記録した。①は、SK-45の断面を計測した位置である。②は、調査区南端において、法面も含めて観察したので、地山土層の深部も確認することができた。表土層から地山土層までの基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層 暗灰色粘質土 粘性あり。締まり弱い。径1~3mmの炭化物粒を少量含む。 = 現表土層

第Ⅱ層 暗灰色粘質土 粘性あり。締まり弱い。径1~3mmの炭化物粒を少量含む。地山土が混入する。 = 第Ⅰ層と第Ⅲ層の混合土層

第Ⅲ層 黄褐色粘土 粘性あり。締まり強い。 = 地山土層

第Ⅳ層 黄白色粘土 粘性あり。締まり強い。第Ⅲ層よりも明色を呈する。 = 地山土層

本発掘調査では、地山土層である第Ⅲ層の上面を遺構確認面とした。現地表面から遺構確認面までの深度は、20~40cmである。

なお、遺物包含層や地山漸移層は確認できなかった。第Ⅰ層と第Ⅱ層はほぼ同質の土層であるが、第Ⅱ層には第Ⅲ層が混入している。また、第Ⅱ層と第Ⅲ層の境界は直線的ではなく、不規則な波状をなしていた。これらのことから、第Ⅲ層の上にあった遺物包含層などは、耕作などによって攪拌されてしまい、土層としては確認できなくなつたと推測される。

3) 造構の分類と記述の方法

検出した造構の名称は、「造構種別の略号・造構番号」とした。造構種別の略号は、SKp：ピット・柱穴、SK：土坑、SD：溝、SA：柱列である。

造構番号は、基本的に現地で付した通し番号をそのまま踏襲した。これは造構の種別に関係なく検出順としたものであり、重複するものはない。また、柱列のように複数の柱穴で構成される組合せ造構については、A地区との重複を避けて2001以降の番号を付した。

また、本報告書で使用した造構の平面形態・断面形態の分類は、和泉A遺跡〔新潟県教委ほか1999〕の分類（第4図）に準拠した。分類の一覧は以下のとおりである。

平面形態

円 形：長径が短径の1.2倍未満のもの。

梢円形：長径が短径の1.2倍以上のもの。

方 形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの。

長方形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの。

不整形：凸凹で一定の平面形を持たないもの。

断面形態

台形状：底部に平坦面を持ち、緩やか～急角度に立ち上がるもの。

箱 状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ちあがるもの。

弧 状：底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの。

半円状：底部に平坦面を持たない碗状で、急角度に立ち上がるもの。

U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。

V字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの

灑斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。

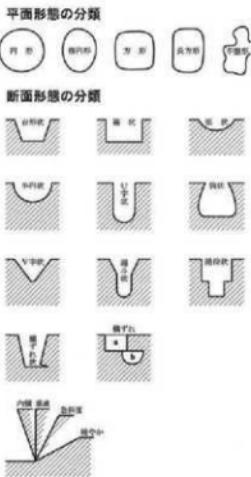
階段状：階段状の立ち上がりを持つもの。

2 各 説

個別造構の情報については、造構観察表（第3表）を参照されることとし、ここでは造構の種別ごとに特徴などを述べることとしたい。

1) 柱穴・ピット

46基の柱穴・ピットのうち、16基は柱穴列を構成すると考えられる。後述するように、この柱穴列は近代以降の造構と考えられるので、これを除く30基に古代の造構が含まれる。以下、これらに大別して概要を述べる。



第4図 造構分類図

〔新潟県教委ほか1999〕を一部変更

① 柱穴・ピット（柱穴列を除く）
柱穴列を除く柱穴・ピットは、平面規模から、短径60cm前後と短径10~40cmの2類に大別できる。

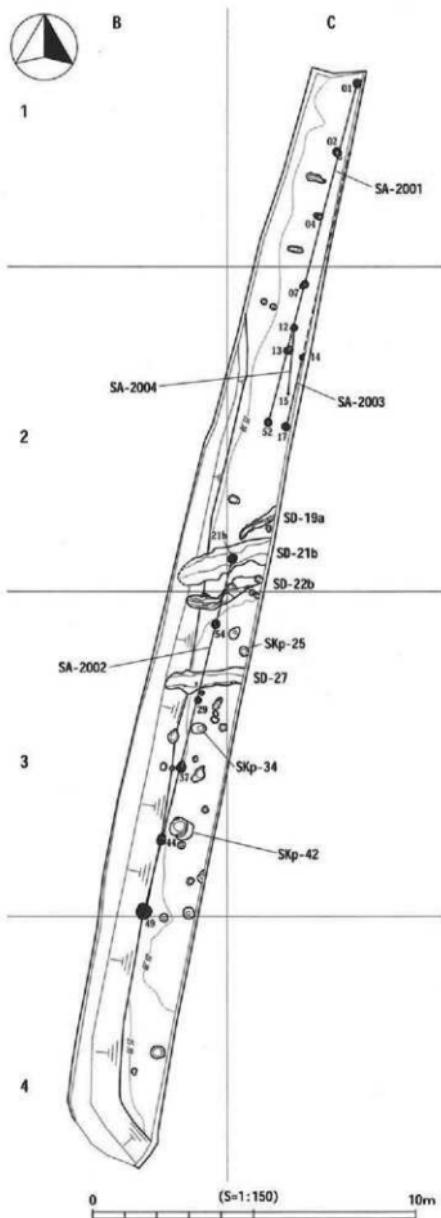
前者は、SKp-42のみが該当する。SKp-42（図版4・9）は、平面が73cm×62cmの隅丸方形をなしている。覆土の断面からは幅約50cmの柱痕（第1~3層）が確認された。底部では4点の礫が出土した。柱痕部分の直下にあたるため、柱材の沈下を防ぐ根石と考えられる。南側のA地区も含め【柏崎市教委2017】、周囲では比較的大型の柱穴といえ、建物跡などは調査区東側への展開が予想される。

後者に該当する29基のうち、覆土の断面観察で柱痕が確認できた4基を柱穴とし、これ以外の確認できなかった25基をピットとした。ピットは覆土が単層のものが多いが、SKp-25・SKp-34（図版4・10）のように上下2層となっているものもある。出土遺物としては、SKp-43から土師器片が出土しているのみであるが、その他も含め、古代に比定できるものがあると考えられよう。

② 柱穴列
可能性があるものを含めると、4列確認された。組合せ遺構であるため、名称をSA-2001・SA-2002・SA-2003・SA-2004とする。4列のうち、柱穴の配置や出土した柱根の形態などから、I類・II類に分類される。

I類は、主軸方向がN-13~15°-Eで、出土した柱根の下端部が平坦なもの（柱根A類）である。SA-2001・SA-2002が該当し、SA-2003もI類と推測される。

SA-2001は、調査区の北側へも延長することが考えられるが、SA-2002が6基の柱穴によることから、断定はできないが、SA-2001も6基の可能性がある。各柱穴は、長径25~29cm×短径18~27cm、底面標高は24.7~25.0mで、深度21~47cmである。覆土には地山土が



第5図 磯辺遺跡B地区主要遺構配置図

第3表 煤田测区白地区湿润带观察表

序号	带分带	坡向	坡度	平均海拔	断面剖面	断面高程	断面坡度	断面长(m)	断面宽(m)	断面特征		出露地层	地质带	带面	带号		
										上层土	下层土						
Ma-	1	东 ₂	东 ₂	110	U形谷	南	27	27	34.44	0.35	1. 黄褐色粘土 2. 黑褐色粘土	1. × 2. ×	1. × 2. ○(3-6m) 3. ×	1A-2001	近代冲积		
Ma-	2	东 ₂	东 ₂	100	冲积带	南	27	29	35.10	24.3	0.24冲积带粘土	<	x		冲积	2A-2001	近代冲积
Ma-	3	东 ₂	东 ₂	100	冲积带	南	62	21	35.10	35.04	0.18冲积带粘土	△ (8-12m)	x				
Ma-	4	东 ₂	东 ₂	100	冲积带	U形谷	28	18	35.17	34.31	0.26冲积带+冲积带土	△ (8-12m)	x				
Ma-	5	东 ₂	东 ₂	100	冲积带	冲积	47	19	35.19	35.17	0.06冲积带+冲积带土	△ (8-12m)	x				
(冲积)	6	冲积	(冲积)														
Ma-	7	东 ₂	东 ₂	80	冲积带	冲积带	39	20	35.17	34.96	0.31冲积带土	1. 黄褐色粘土 2. 黑褐色粘土	1. × 2. ×	1. ○ (3-6m) 2. ○ (3-6m)	冲积	1A-2001	近代冲积
Ma-	8	东 ₂	东 ₂	70	冲积带	冲积带	19	18	35.13	35.07	0.07冲积带+冲积带土	△ (8-12m)	x	○ (3-6m)			
Ma-	9	东 ₂	东 ₂	70	冲积带	冲积带	38	18	35.16	35.05	0.11冲积带+冲积带土	x		○ (3-6m)			
(冲积)	10	冲积	(冲积)														
(冲积)	11	冲积	(冲积)														
Ma-	12	东 ₂	东 ₂	50	冲积带	冲积	22	21	35.17	35.06	0.12冲积带粘土	△ (8-12m)	x	○ (3-6m)	K-1-178 (18)	1A-2004	近代冲积
Ma-	13	东 ₂	东 ₂	40	冲积带	U形谷	38	29	35.18	34.71	0.47冲积带粘土	△ (8-12m)	x	○ (3-6m)		2A-2004	近代冲积
Ma-	14	东 ₂	东 ₂	40	冲积带	冲积	27	17	35.18	34.88	0.38冲积带粘土				冲积带	3A-2004	近代冲积
Ma-	15	东 ₂	东 ₂	30	冲积带	冲积	7	9	35.17	35.17	/					3A-2004	冲积带
(冲积)	16	冲积															
Ma-	17	东 ₂	东 ₂	10	冲积带	U形谷	35	25	35.14	34.95	0.35冲积带粘土	1. 黄褐色粘土 2. 黑褐色粘土	1. × 2. ×	1. ○ (3-6m)		3A-2003	近代冲积
Ma-	18	东 ₂	东 ₂	10	冲积带	冲积	140	20	35.18	34.39	0.20冲积带粘土	1. 黄褐色粘土 2. 黑褐色粘土	1. × 2. ○ (3-6m)				
Ma-	19	东 ₂	东 ₂	10	冲积带	冲积	18	16	35.18	34.95	0.35	x	x				

記号	番号	ゲノム	性別	平均年齢	測定部位	頭部			腹部			四肢			尾部			出生部位			性状		
						左耳後	右耳後	左耳前	右耳後	左耳前	右耳後	左前脚	右前脚	左後脚	右後脚	左側面	右側面	左腹面	右腹面	左側面	右側面	左腹面	右腹面
Sig-	20	C2	ヒット	両耳後	UTPRC	-20	14	25.18	25.08	9.10	-	-	-	-	-	-	-	-	10	上顎骨 (9.5 g)	-	-	
Sig-	21	a	ヒツジ	後	後	耳後部	後	296	69	15.2	14.99	9.12	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11b-1の頭部は不明
Sig-	21	b	C2	ヒツジ	両耳後	UTPRC	-20	24	15.2	14.97	9.43	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	21	c	ヒツジ	後	後	耳後部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11b-1の頭部は不明	
Sig-	21	d	C2	ヒツジ	両耳後	UTPRC	-20	24	15.2	14.97	9.43	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	22	a	C2	ヒツト	平頭	VTPR	-39	39	20.15	25.02	9.16	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	22	b	C2	ヒツト	平頭	VTPR	-39	49	15.2	14.98	9.40	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	22	c	C2	ヒツト	平頭	VTPR	-39	49	15.2	14.98	9.40	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	22	d	C2	ヒツト	平頭	VTPR	-39	49	15.2	14.98	9.40	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	22	e	C2	ヒツト	平頭	VTPR	-39	49	15.2	14.98	9.40	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	23	C3	ヒツト	両耳後	UTPRC	-18	16	25.21	24.99	9.32	1. 頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002		
Sig-	24	C3	ヒツト	両耳後	UTPRC	-20	16	25.21	24.97	9.24	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002		
Sig-	25	C3	ヒツト	両耳後	UTPRC	-20	16	25.21	24.98	9.25	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002		
(1×8)				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002	
Sig-	27	ヒツジ	後	後	頭部	後	246	72	15.35	15	9.13	2. 頭部	後	1. ×	2. ×	1. △ (10.5-11.0g)	2. ○(10.5-11.0g)						
Sig-	28	C3	ヒツト	両耳後	UTPRC	-13	12	25.29	25.18	9.04	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	28	E3	ヒツト	両耳後	UTPRC	-21	18	25.23	24.91	9.12	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	29	E3	ヒツジ	両耳後	VTPR	-42	18	25.23	24.93	9.20	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	30	E3	ヒツト	両耳後	VTPR	-39	16	25.25	24.98	9.30	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	31	E3	ヒツト	両耳後	VTPR	-23	16	25.25	24.98	9.30	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	32	E3	ヒツト	平頭	VTPR	-23	16	25.25	25.21	9.02	1. 頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	33	E3	ヒツト	平頭	VTPR	-26	16	25.25	24.98	9.06	2. 頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	34	E3	ヒツト	平頭	VTPR	-46	21	25.25	24.63	9.60	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	35	E3	ヒツジ	平頭	UTPRC	-46	22	15.2	15.07	9.13	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	36	E3	ヒツト	両耳後	頭部	-18	13	25.25	24.98	9.06	1. 頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002
Sig-	37	E3	ヒツジ	平頭	UTPRC	-26	26	25.25	24.92	9.30	頭部	後	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11a-2002

采收年	季	产地	特征	品种	原产地	播种期	播量(g/m ²)	株距(cm)	行距(cm)	苗期	生长期	花期	果熟期	贮藏期	用途	编号
94r~	38	33	比7-1	性弱	平顶形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	38
94r~	39	33	比7-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	39
94r~	40	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	40
94r~	41	33	比7-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	41
94r~	42	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	42
94r~	43	33	比7-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	43
94r~	44	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	44
94r~	45	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	45
94r~	46	33	比7-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	46
94r~	47	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	47
94r~	48	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	48
94r~	49	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	49
94r~	50	33	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	50
94r~	51	34	比6-1	性弱	V字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	51
94r~	52	34	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	52
94r~	53	34	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	53
94r~	54	34	比6-1	性弱	U字形	播种期	100	15	15~25	25~30	8~15周	果熟期	贮藏期	生长期	早熟	54

中華書局影印
宋史卷一百一十五

著者の記述は次のとおりとした。

SA-2001							
柱穴	01	02	04	07	13	52	延長 10.80
位置	C1	C1	C1	C2	C2	C2	主軸方向 N-15°-E
柱根		A類	A類	A類	A類	A類	備考
土器等							I類
柱間		2.22	2.05	2.16	2.07	2.30	
SA-2002							
柱穴	21b	54	29	37	44	49	延長 11.21
位置	C2	B3	B3	B3	B3	B3~4	主軸方向 N-14°-E
柱根		A類		A類	A類		備考
土器等						近代磁器	I類
柱間		2.11	2.36	2.09	2.33	2.32	
SA-2003							
柱穴	14	17					延長 2.03 (以上)
位置	C2	C2					主軸方向 N-13°-E
柱根							備考
土器等							北西側に延長する可能性。 I類
柱間		2.03					
SA-2004							
柱穴	12	15					延長 2.19 (以上)
位置	C2	C2					主軸方向 N-5°-E
柱根	B類	B類					備考
土器等	瓦						南側に延長する可能性。 II類
柱間		2.19					

① 柱穴の個別内容は第〇表参照。

② 「柱根」欄の分類は第V章参照。

③ 「柱間」・「延長」欄の単位はm。

第4表 磯辺遺跡B地区柱穴列概要表

やや多く混合するものがあり、締まりが弱い。出土遺物は柱根のみである。

SA-2002は、6基の柱穴で構成される。周囲には痕跡がないことから、さらなる延長はない。柱穴は、長径21~34cm×短径18~24cm、底面標高は24.7~25.0mで、深度30~43cmである。ただし、南端のSKp-49のみはやや大きく、長径48cm×短径46cm、底面標高は24.5mで、深度72cmを測る。覆土は、SKp-37が地山土を主体とするが、それ以外は地山土の混入が少なく、SA-2001と異なっている。ただし、SA-2001と同じく、締まりは弱い。遺物は、柱根のほかにSKp-49から近代とみられる磁器の破片が出土している。

SA-2003は、調査区東側に延長していたことが考えられる。柱穴は、長径25cm前後×短径20cm前後、底面標高は24.9m前後で、深度30cm前後である。

柱穴列I類は、主軸方向が現道に沿っていること、出土遺物から近代以降の所産とみられることなどから、水田の稻架木跡と推測される。なお、SA-2003のSKp-14・SKp-17は、SA-2001のSKp-13・SKp-52から20~25cmの位置にあり、並行した位置関係にある。そのため、SA-2003はSA-2001に関係した遺構とみら

れる。あるいは、SA-2001からは柱根が出土しているが、SA-2003からは出土していないことを考慮すると、(古) SA-2003→SA-2001(新)と変遷した可能性も考えられよう。

II類は、主軸方向がN.5°-Eで、出土した柱根の下端部が杭状を呈すもの(柱根B類)である。SA-2004が該当する。SA-2004を構成するのはSKp-12-SKp-15である。SKp-12には柱根(杭)の周間に地山土が混合する覆土がみられたが、SKp-15には覆土がなく、柱根(杭)が打ち込まれているのみであった。SKp-15から南側に延長する可能性もあるが、調査区の東側となるため、明らかではない。SKp-12から瓦片が出土しているため、時期は近代以降と考えられる。

出土遺物からみると、I類とII類はいずれも近代以降とみられる。I類のSA-2001とII類のSA-2004は重複しているため、近代以降でも時期差があることが考えられる。しかし、両者には柱痕が遺存しているため、地表面での切断などがなされていなければ、同時に存在していた可能性もある。その場合、SA-2004は稻架木跡とみられるSA-2001に付随した構築物になろう。

2) 土坑

土坑としたのはSK-45のみであるが、SK-03・SK-05も可能性がある。ただし、SK-03・SK-05は底面に凹凸があり、覆土も縮まりが弱いため、時期は近代以降と推測される。

SK-45(図版4・8)は、発掘できたのは一部のみとなったが、不整な梢円形を呈する土坑とみられる。須恵器・土師器の小片が出土しているので、古代の遺構である。

3) 溝

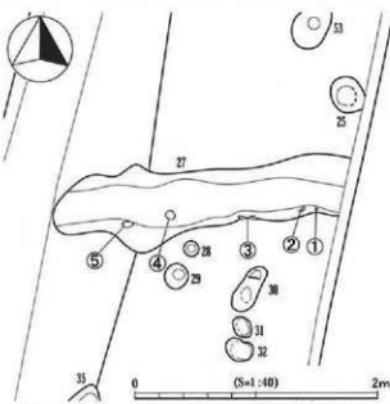
溝は、B～C2グリッド南半およびB～C3グリッド北端にSD-19a・SD-21a・SD-22bがあり、B～C3グリッド北半にSD-27がある。いずれも(北)東から(南)西へ傾斜しているが、これは地形に沿ったものとみられる。

SD-19aは、一部にピット状の落込みがあるなど、底面に段差を持つ溝である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

SD-21a(図版4・10)は、底面がおおむね平坦な形態をなしている。覆土は単層で、地山土が多く含まれている。土師器片が出土しているので、古代の遺構とみられる。

SD-22b(図版4・10)は、平面形態は溝状であるが、断面形態は極端に鋭角なV字状をなし、覆土は第Ⅱ層に類似した土層が堆積している。人為的な遺構ではなく、地割れなどといった自然遺構の可能性もある。

SD-27(図版9)は、断面形態が箱状となる溝である。下層に黒色砂層が薄く堆積しており、水流の痕跡と推測される。左岸側(南側)には部分的に板材(①～③・⑤)が出土した。護岸の意図があったとみられる。本溝は、出土した磁器から、近代以降の所産と考えられる。



第6図 磯辺遺跡SD-27木製品出土位置

V 遺 物

1 概 要

本遺跡から出土した遺物は約70点である。内容は、種類別にみると、土器・陶磁器、木製品、礫がある。また、土器・陶磁器は小破片のみであるが、時期別にみると古代・近世（以降）のものがある。出土位置としてはB3～4グリッドにみられ、遺構の分布とおおむね重複する。木製品は、柱根が調査区の全体に分布するが、これは近代以降のものと推測される。礫は古代の柱穴に伴う。

2 土器・陶磁器

土器・陶磁器の種別及び数量としては、古代の須恵器7点、古代の土師器35点、近世以降の陶磁器9点である。いずれも10cmに満たない小破片で、全体の器形がわかるものはない。このうち図化が可能だったのは、古代の須恵器4点、古代の土師器5点、近世の陶器1点、近世の磁器1点となった。ここでは種別に概要を説明するが、図化した土器・陶磁器の詳細については、観察表（第5表）を参照されたい。

須恵器（図版4・11-1～4） B3～4グリッドの第II層で出土している。1は杯蓋、2～4は杯身の破片である。4は無台杯であるが、2もその可能性がある。胎土からは、いずれも佐渡小泊窯産とみられる。時期は、佐渡小泊窯須恵器の流通状況【春日1999など】やA地区での調査成果【柏崎市教委2017】から、9世紀前半頃と推測される。

土 师 器（図版4・11-5～9） 表土層（第I層）やB4グリッドの第II層で出土している。図化した5点は、無台椀もしくは小甕の底部片である。器形や胎土をみると、5は底部が厚手で胴部との境界が明瞭であるが、6・7は薄手で胎土が比較的精良といえる。A地区でも類似した形態の無台椀が出土している【柏崎市教委2017】。8は厚手で胎土が白色気味であるが、器形からは無台椀の他にも小甕の可能性がある。9は小甕である。時期は、前述した須恵器の年代観やA地区での調査成果【柏崎市教委2017】から、やはり9世紀前半頃と推測される。

陶 器（図版4・11-11） 11は肥前陶器の擂鉢である。外面にロクロ成形の痕跡があり、内面の擂目は間隔があいていない。また、この破片には鉄軸がみられない。これらのことから、肥前III期（1650～90年代）の製品である可能性が考えられる【家田2000】。

磁 器（図版4・11-10） 10は肥前磁器の碗である。外面に二重格子文があり、内面にも口縁部に格子文がみられる。波佐見のV-4期（1820～1860年代）に多い製品である【中野2000】。

3 木 製 品

17点の木製品のほか、木炭の小破片が出土した。前者は柱根と板材・角材に分類される。以下、それぞれの概要を述べるが、個々の詳細は一覧表（第6表）を参照されたい。

番号	出土位置			法長(cm)			成形・調整			輪			色調	備考
	通路	グリッド	底版	底版	輪幅	高台板	高台板	口沿	底版	底版	底版	底版		
1 通路外			I	土壟面	杯底	13.0	—	(1.7)	口沿成形：白色焼泥△ 白色焼泥○ 黒色焼泥△	黑色燒 泥	黑色燒 泥	黑色燒 泥	(576/1)	
2 通路外	R3		II	有底面	杯	11.0	(3.0)	口沿成形：白色焼泥○ 白色焼泥△ 黑色燒 泥△	白色燒 泥△	黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	(677/1)	
3 通路外			I	有底面	杯		(1.8)	口沿成形：白色焼泥○ 白色焼泥△ 黑色燒 泥△	白色燒 泥△	黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	(576/1)	
4 通路外	R4	調査区域	II	有底面	無台板	9.2	—	(1.7) 口沿成形：柄～ 手切り削 線	白色燒泥○ 白色燒泥△ 黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	黑色燒 泥△	(567/)	
5 通路外	R4		II	土壟面	無台板	6.0	—	(1.7) 口沿成形	白色燒泥△ 白色燒泥○ 下△	白色燒泥△	白色燒泥△	白色燒泥△	(577/6) (577/8)	
6 通路外			I	土壟面	無台板	4.6	—	(1.9) 口沿成形	白色燒泥△ 白色燒泥○ 下△	白色燒泥△	白色燒泥△	白色燒泥△	(7. 578/4)	
7 通路外		I	土壟面	無台板		4.9	—	(0.4) 口沿成形	白色燒泥△ 黑色燒泥△	白色燒 泥△	白色燒 泥△	白色燒 泥△	(578/4)	
8 通路外			I	土壟面	無台板も しくは 小甌	5.6	—	(1.6) 口沿成形	白色燒泥△ 白色燒泥○ 下△	白色燒泥△	白色燒泥△	白色燒泥△	(1078/3)	
9 通路外	R4		II	土壟面	小甌	7.8	—	(1.5) 口沿成形	白色燒泥○ 白色燒泥○ 下△	白色燒泥△	白色燒泥△	白色燒泥△	(578/6) (7. 578/4)	×ス付番
10 SW-27	R3			記録器	網		(3.9)	口沿成形		良	良	良	(88/)	
11 通路外	R3			記録器	網		—	(4.9) 口沿成形		良	良	良	(1078/1) (2. 578/3)	×ス付番

WILHELM, GÖTTSCHE, ETC.

第5表 磁刃遺跡B地区土器・陶磁器観察表

遺構	位置	構成する遺構	長さ	幅 径	厚さ	分類	木取り	断面形状	備考
SKp-02		SA-2001	58	15	—	柱根A類	芯	円形	耐震が残存する。下端部に低い段がある。端の後内直しと想われる。
SKp-04		SA-2001	46	12	—	柱根A類	芯	円形	腐食する。
SKp-07		SA-2001	53	13	—	柱根A類	芯	円形	腐食する。
SKp-13		SA-2001	58	12	—	柱根A類	芯	円形	下端部の一端が斜方向に切断される。腐食する。
SKp-32		SA-2001	59	12	—	柱根A類	芯	円形	
SKp-37		SA-2002	61	15	—	柱根A類	芯	円形	
SKp-44		SA-2002	66	15	—	柱根A類	芯	円形	
SKp-54		SA-2002	68	15	—	柱根A類	芯	円形	
SKp-12			33	8	—	柱根B類	芯	円形	下端部は4面から削る。
SKp-15			38	7	—	柱根B類	芯	円形	下端部は4面から削る。
SKp-03			35	5	—	柱根B類カ	芯カ	円形	下端部が遺存していない。
SKp-53			39	6	1	板材カ	板目カ	(板)カ	板目に割れているため、原形は明らかではない。
SD-27	①		37	18	2	板材	板目	(板)	
SD-27	②		35	17	2	板材	板目	(板)	
SD-27	③		35	9	2	板材	板目	(板)	
SD-27	④		7	9	6	角材	芯・板目	長方形	腐食する。
SD-27	⑤		32	14	2	板材	板目	(板)	

柱根A類：下端部が平坦（圓底）

柱根B類：下端部が杭状

第6表 機辺遺跡B地区木製品一覧表

柱・根 木柱あるいは木杭の下端部のみが遺存したものである。本来は両者を分類すべきであるが、ここでは便宜上ひとまず柱根に一括した。なお、後述するように、近代以降の所産と考えられるため、図化・撮影は割愛した。

出土したのは、合計11点である。下端部の加工痕をもとに、A類：下端が平坦なもの、B類：下端が杭状のものに分類した。A類は8点である。径12~15cmで、すべて断面形状が円形の芯材である。底面の観察から、鋸による切断が考えられる。出土したのはSA-2001-SA-2002とした柱列を構成する柱穴で、近代以降の橋架木の痕跡と推測される。B類は3点である。SKp-03は不明であるが、SKp-12・SKp-15は出土した遺構の状況から、これに前後する時期の所産と考えられる。

板材・角材 SD-27溝から5点出土している。出土位置を①~⑤で示しているが（第6図）、④以外は板材で、溝の護岸をなしていたとみられる。芯持の角材である④は不詳である。SD-27からは近代以降の磁器が出土しているため、これらの木製品も同じ時期と考えられる。

木炭 SKp-34・SKp-42から若干出土している。遺構はピット・柱穴であるため、木炭は木柱に由来する可能性があろう。

4 碑

碑は、古代の柱穴と考えられるSKp-42から4点出土している（図版4）。①は13cm大・1.1kg、②は15cm大・3.9kg、③は9cm大・0.4kg、④は10cm大・1.0kgを測る。いずれも安山岩質で加工根はみられないが、①・③は被熱によるためか、赤灰色を呈している。柱根部の底部に位置しているので、柱の沈下などを防ぐ根石などの用途が考えられる。その他、SD-27から3点（計0.3kg）が出土している。

V 総 括

今回の発掘調査は対象面積が小さいため、発見された遺構・遺物は少ない。しかし、南側のA地区で確認された古代集落〔柏崎市教委2017〕の北側への延長が確認されたことになる。また、古代の遺構・遺物は、調査区の南半にみられ、北半には稀薄である。さらに、平成24年度の第1次試掘調査TP1-47では、古代の遺物と柱穴が検出されている〔柏崎市教委2015 b〕。これらは、標高が低くなる本遺跡の北端の状況や東側への広がりを示唆するものといえる。ただし、現在県道となっている西側は、遺跡が立地する段丘が削られたものであるが、本来は同じ段丘面が広がっていたと思われる。そのため、段丘の縁辺部へも遺構・遺物が展開していた可能性が考えられる。

なお、SKp-42柱穴は、A地区を含めても大型の柱穴である。調査区内では確認できなかったが、建物跡といった遺構の存在が想定される。その場合、柱穴規模や柱間隔が大きいことから、A地区で検出された掘立柱建物跡よりも大きい規模の遺構であることが考えられよう。本遺跡において、この遺構がどのように位置付けられるのかは今回の調査では明らかにできなかつたので、今後の課題としたい。

◀ 引用・参考文献 ▶

- 相澤 央 1998「八幡林遺跡と郡の支配」『新潟史学』第40号 新潟史学会 のち 同 2016「越後と佐渡の古代社会
－出土文字資料の読解－」 高志書院 に所収
- 相澤 央 2007「越後国の成立と蝦夷政策」『新潟史学』第58号 新潟史学会 のち 同 2016「越後と佐渡の古代社会
－出土文字資料の読解－」 高志書院 に所収
- 家田淳一 2000「擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」『九州陶磁の歴年－九州近世陶磁学会10周年記念－』 九州近世陶磁学会
- 猪爪一郎 1996「毛利北条氏研究小史－いわゆる『天文二十四年の謀叛』について－」『柏崎刈羽』第23号 柏崎・
刈羽郷土史研究会
- 宇佐美篤美・高橋 保 1987「周広院遺跡」柏崎市史編さん委員会編『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料（図・拓
本・説明） 柏崎市史編さん室
- 宇佐美篤美・坂井秀弥 1987「下加納遺跡」柏崎市史編さん委員会編『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料（図・拓
本・説明） 柏崎市史編さん室
- 岡本郁栄 1987「十二沢遺跡」柏崎市史編さん委員会編『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料（図・拓本・説明） 柏
崎市史編さん室
- 柏崎郷土資料刊行会 1979「郷土誌 中鱗石村誌」
- 柏崎市教育委員会 1985 a 「吉井遺跡群」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4）
- 柏崎市教育委員会 1985 b 「刈羽大平・小丸山」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5）

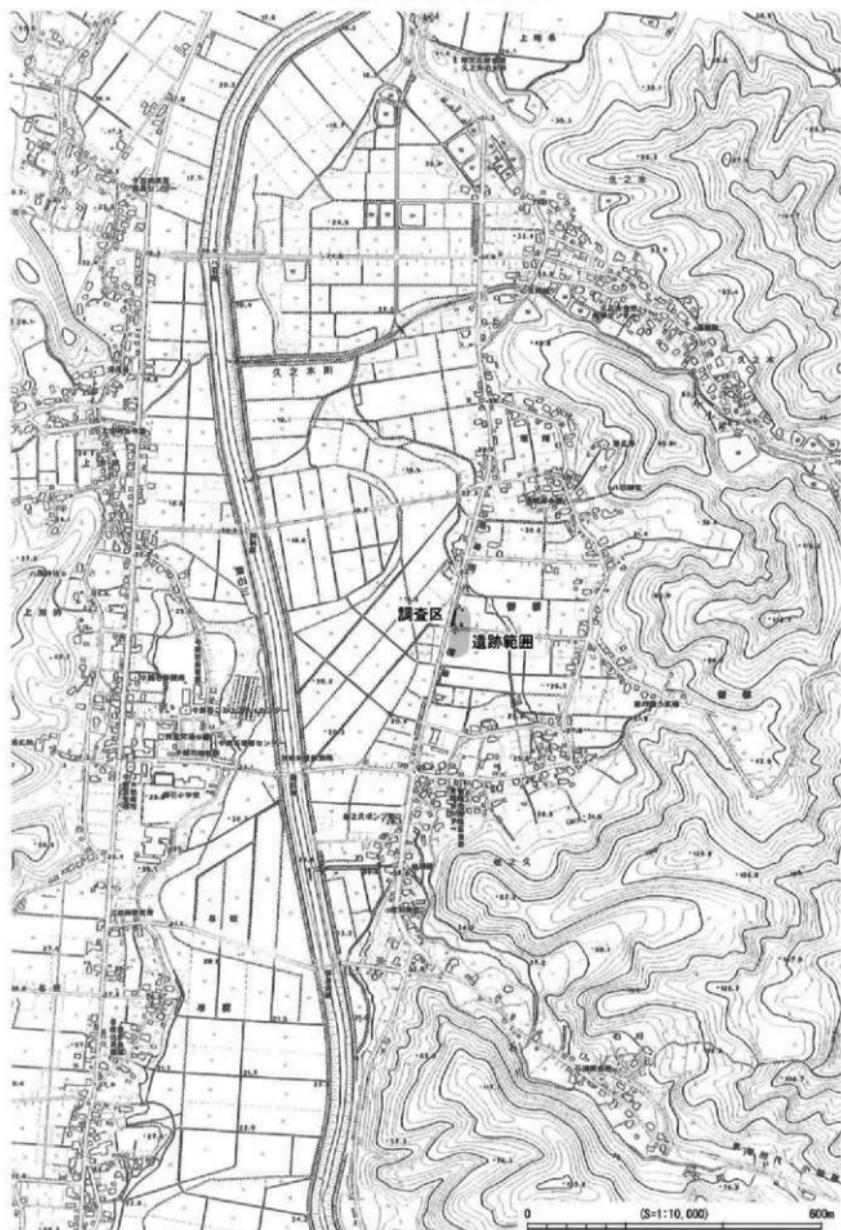
- 柏崎市教育委員会 1990 「吉井遺跡群Ⅱ」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13集)
- 柏崎市教育委員会 1996 「宮平遺跡群 秋里遺跡 現地説明会資料」
- 柏崎市教育委員会 1998 「山王前」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第28集)
- 柏崎市教育委員会 2001 「宮之下遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集)
- 柏崎市教育委員会 2003 「下川原」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第42集)
- 柏崎市教育委員会 2006 「柏崎市の遺跡XV」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第49集)
- 柏崎市教育委員会 2008 「柏崎市の遺跡XVI」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第54集)
- 柏崎市教育委員会 2010 「軽井川南遺跡群Ⅲ」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第61集)
- 柏崎市教育委員会 2011 「南条遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第64集)
- 柏崎市教育委員会 2012 「音無瀬Ⅰ」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集)
- 柏崎市教育委員会 2013 「音無瀬Ⅱ」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第72集)
- 柏崎市教育委員会 2014 「坂田II・上加納」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第76集)
- 柏崎市教育委員会 2015 a 「善根大坪」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第79集)
- 柏崎市教育委員会 2015 b 「柏崎市の遺跡24」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第80集)
- 柏崎市教育委員会 2017 「鐵匂II」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第87集)
- 柏崎市史編さん委員会編 1987 「柏崎市史資料集」古代中世篇 柏崎の古代中世史料 柏崎市史編さん室
- 柏崎市立図書館編 1977 「白川風土記 越後国刈羽郡之部」(広瀬典原著) 柏崎郷土資料刊行会
- 柏崎平野団体研究グループ 1979 「柏崎平野の地形発進史と下谷地遺跡周辺の地形」(北陸自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡) (新潟県埋蔵文化財調査報告書第19号) 新潟県教育委員会
- 春日真実 1999 「土器編年と地域性」新潟県考古学会編「新潟県の考古学」高志書院
- 桑原正史 2007 「越後國三鶴郡の成立年代について -宋史日本伝の郡数の検討-」「新潟史学」第57号 新潟史学会
- 小林敬雄・飯川健勝・久保田喜裕・神蔵勝明・渡辺秀男・渡辺文雄 2008 「中越地域西部の地形と地質」地学団体研究会新潟支部中越沖地震調査団編「柏崎・刈羽をおそった地震の被害と基盤- 2007年新潟県中越沖地震」(地団研專報57号) 地学団体研究会
- 斎藤幸恵 1997 「中筋石・宮平地区の古代と中世」(柏崎市の遺跡VI) (柏崎市埋蔵文化財調査報告書第27集) 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1997 「馬場・天神腰道路」北陸中世土器研究会編「中・近世の北陸-考古学が語る社会史-」桂書房
- 新沢佳大 1990 「諸藩領の成立と変遷」・「諸藩領と柏崎町」市史編さん委員会編「柏崎市史」中巻 市史編さん室
- 新沢佳大・栗立俊樹・高橋義昭・今井和幸・桑原紀昭 1990 「町村の展望」市史編さん委員会編「柏崎市史」中巻 市史編さん室
- 高橋義彦編 1971 「佐賀史料」卷五 名著出版
- 中 大輔 2003 「日本古代の駅家と地域社会」『古代交通研究』第13号 古代交通研究会
- 中筋石郷土史クラブ編 1989 「おらが村の昔語り」第2集 地名・俗称篇 中筋石公民館・中筋石郷土史クラブ
- 中筋石郷土史クラブ 1993 「おらが村の昔語り」第3集 誓殺された八石の殿さま
- 中野雄二 2000 「波佐見」「九州陶磁の発展-九州近世陶磁学会10周年記念-」九州近世陶磁学会
- 鳴海忠夫 2002 「越後毛利氏の城館跡-山城の繩張りを中心として-」「北陸の中世城郭」第12号 北陸城郭研究会
- 新潟県 1981 a 「新潟県史」資料編2 原始・古代二
- 新潟県 1981 b 「新潟県史」資料編6 近世一 上越編
- 新潟県 1983 「新潟県史」資料編4 中世二 文書編II
- 新潟県 1984 「新潟県史」資料編5 中世三 文書編III
- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999 「和泉A遺跡 上信越自動車道関係発掘調査報告書V」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集)
- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 「箕輪遺跡II 一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書VI」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第254集)
- 新潟県立柿崎高等学校社会科クラブ歴史班 1970 「八石城址(柏崎市善根)」
- 山崎正治 1984 「柏崎・刈羽の古城址」第2集 高柳・石黒・筋石篇
- 山本隆志・皆川義孝 2004 「高野山清淨心院藏「越後国供養帳」」上越市史専門委員会編「上越市史研究」第9号 上越市
- 米沢 康 1976 「古代北陸道の伝馬制について」「信濃」第28卷5号 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中國四郡分割をめぐって」「信濃」第32卷6号 信濃史学会
- 和島村教育委員会 1994 「八幡林遺跡」(和島村埋蔵文化財調査報告書第3集)

報告書抄録

ふりがな	いそべI							
書名	磯辺I							
副書名	新潟県柏崎市 磯辺遺跡発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書第85集							
編著者名	伊藤啓雄							
編集機関	柏崎市教育委員会(担当:博物館)							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号 TEL 0257-23-5111							
発行年月日	西暦 2017年3月3日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間 西暦年月日	調査面積 m ²	調査原因
磯辺遺跡 いそべいせき	新潟県 柏崎市 おはしきし 大学書報 おおがくしおほくひょう 字磯辺	15205	1009	37度 18分 41秒	138度 37分 50秒	20150831 ～ 20151005	91	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
磯辺遺跡	集落跡	古代	柱穴・土坑・ピット・溝		須恵器・土師器・礫			
	遺物包含地	近世(以降)	杭穴列・ピット・溝		陶磁器・木製品			
要約	<p>遺跡は、鯖石川右岸の沖積段丘に立地する。一般県道田代小国線 歩道設置工事によって消滅する区域について、発掘調査を実施した。</p> <p>遺構は約50基、遺物は約70点が発見された。そのうち約40点が古代の須恵器・土師器の小破片である。調査区を縦断する位置に近代以降の樋架木跡と思われる柱穴列があるが、南側で9世紀前半の集落跡が調査されているので、本調査区にもその一部が及んでいると考えられる。</p>							

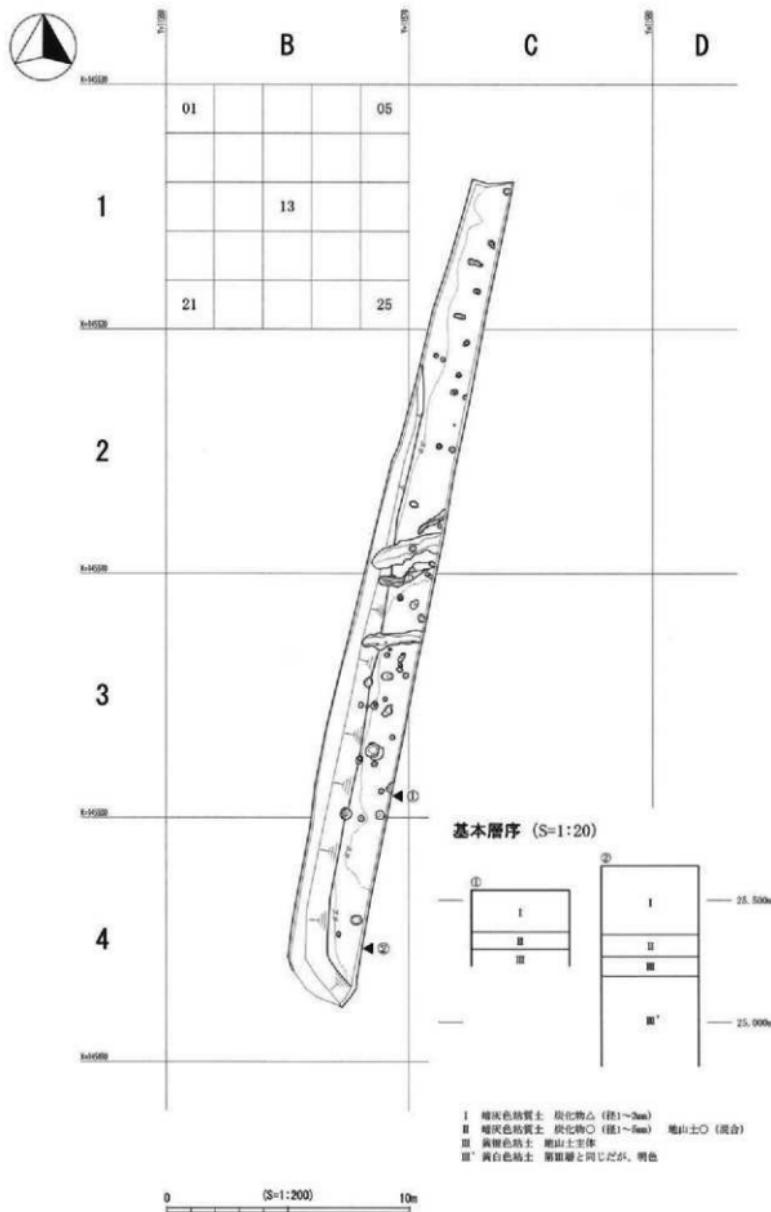
※ 緯度・経度は世界測地系に基づく。

遺跡と調査区位置図



図版2

調査区全体図



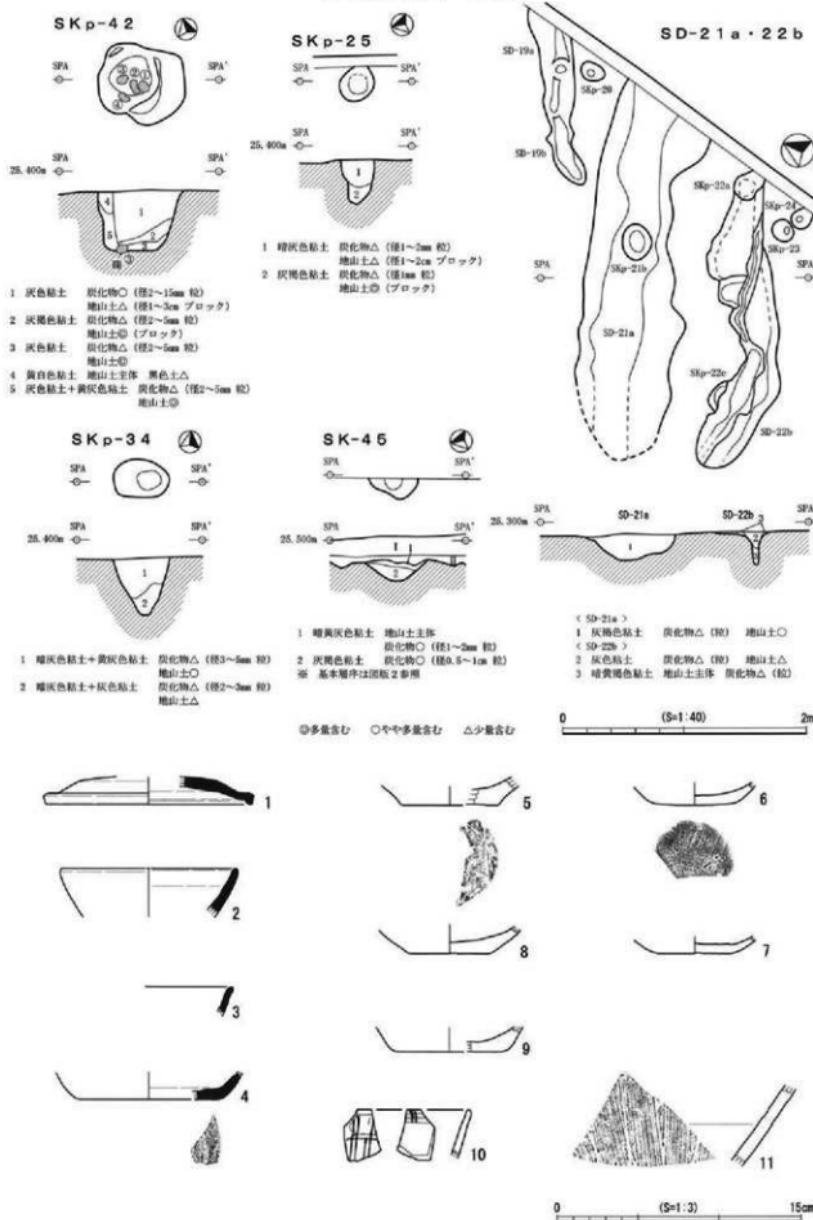
調査区分割図

図版 3



図版4

遺構個別図・遺物



調査区全景 1



a. 調査区空中写真

(南東から)



b. 調査区全景

(南から)



c. 調査区全景

(北から)

調査区全景 2



a. 調査区全景

(南から)



b. 調査区(南半)全景

(北から)

調査風景



基本層序



a. 基本層序 1・SKp-45断面

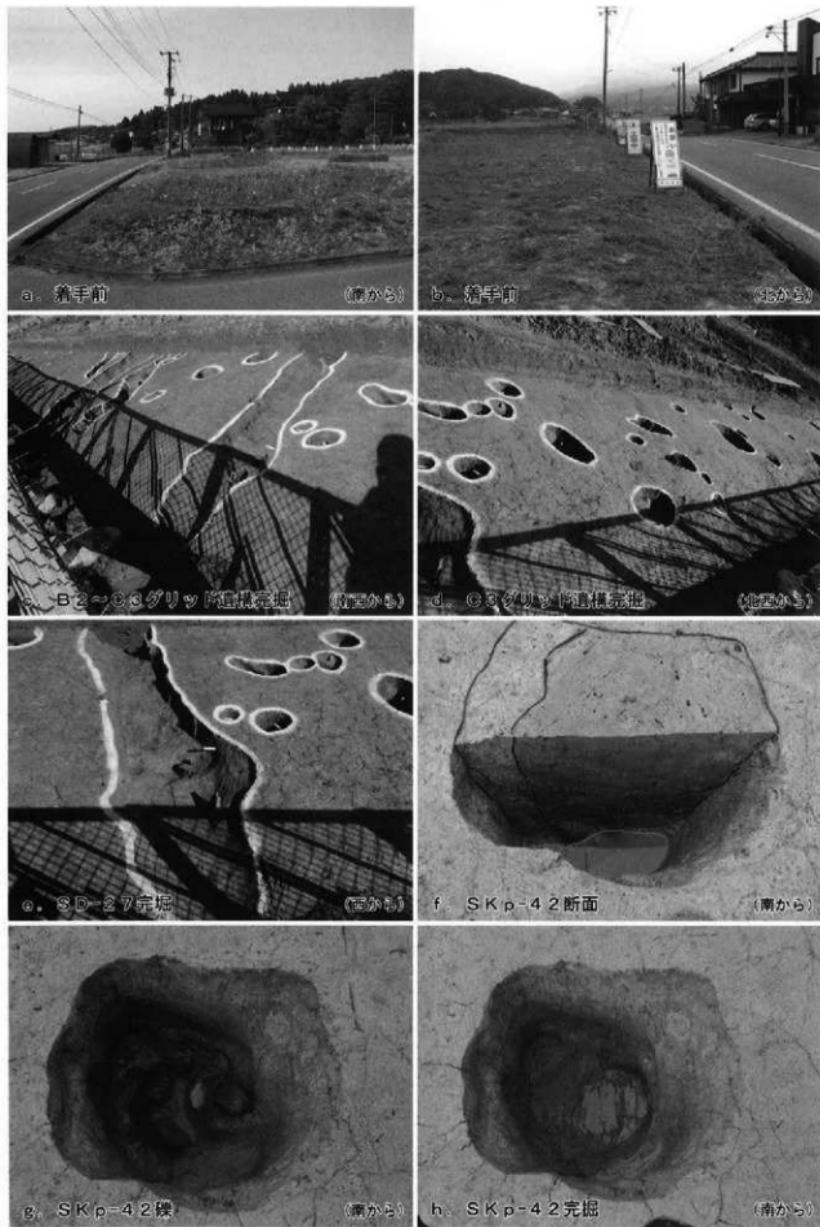
(西から)



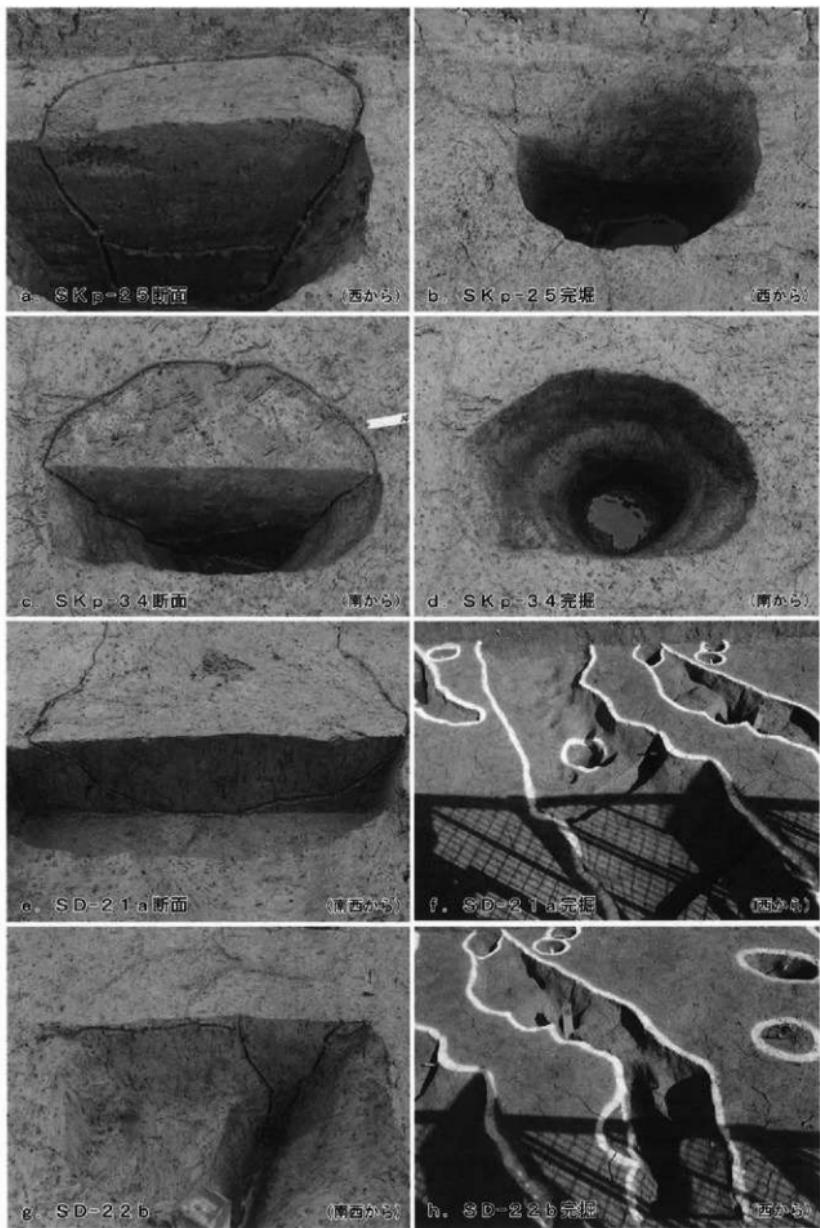
b. 基本層序 2

(西から)

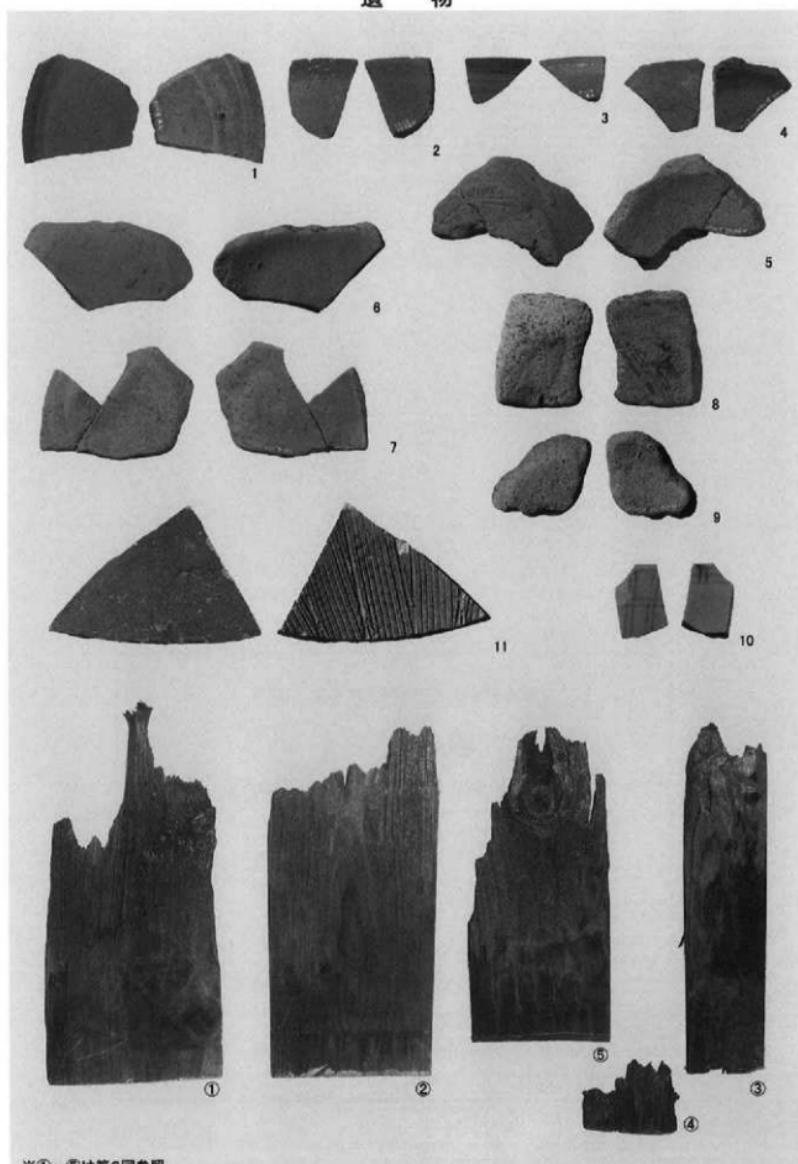
調査区全景3・遺構1



遺構 2



遺物



※①～⑤は第6図参照

1~11 約1:2

①~⑤ 約1:5

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第85集

磯辺 I

—新潟県柏崎市 磯辺遺跡発掘調査報告書—

平成29年 2月24日 印刷

平成29年 3月 3日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号

印刷 株式会社 小田

〒945-1352 新潟県柏崎市安田4153番地1